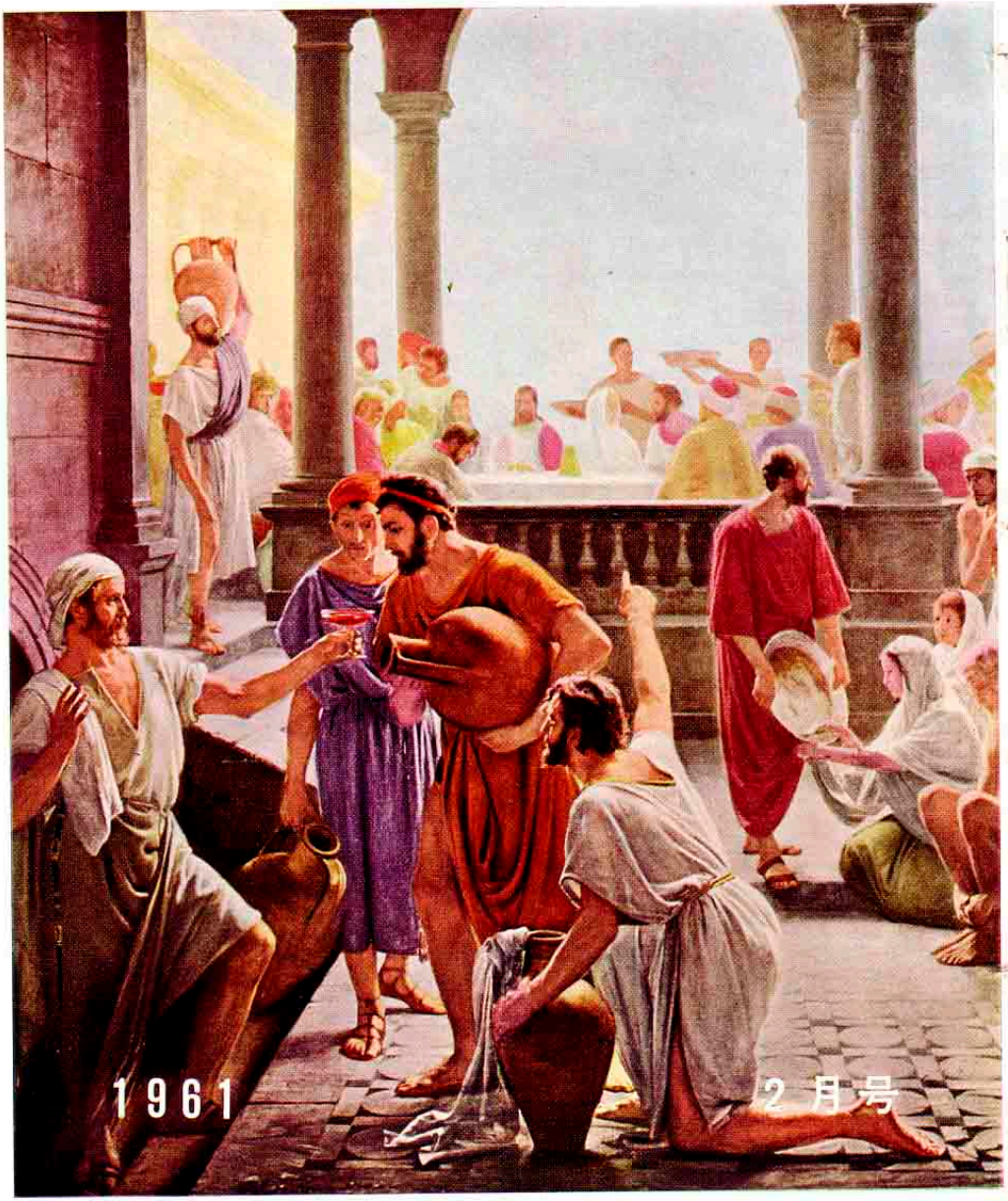
聖徒の道

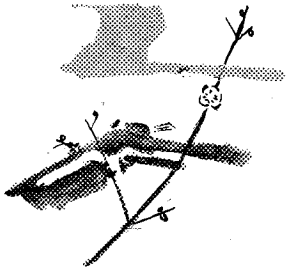
第五ノ年三月十七日第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
第五巻第二号一九六一年二月一日発行



末日聖徒イエス・キリスト教会

聖徒の道

1961年2月号



L.K.

もくじ

〔予言者のことば〕
「求婚期間と結婚との理想について」
……デビド・O・マッケイ…(41)

〔伝道部長メッセージ〕
「伝道部補助管理委員会組織される」
……ポール・C・アンドラス…(48)

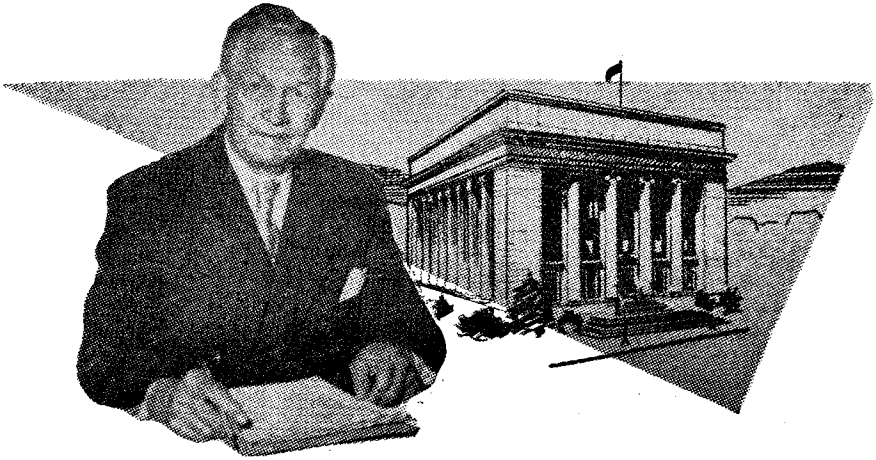
〔モルモンの教義〕
「聖餐の律法」(21)……佐藤竜猪…(49)

ともに考えよう

祈りについて……立野嘉久…(52)
ささやかな願い……林　満喜子…(55)
松本一ソルトレークの結ばれて二年……(56)
ユタ物語(5)…リーヴァイ・エドガー・ヤング……(58)
証詞はいかにして生ずるか……
ステフエン・L・リチャーヅ長老…(61)
光を再びうけた頃(II)……高木富五郎…(62)
新春座談会……仙台支部…(66)
一　言　抄……(69)

ヤンガージエネレーション

よきハィティン群と私……神崎良太郎…(70)
科学と宗教は争うか
……ジョン・A・ウイヅソウー…(73)
もしも私が十代であったなら……(74)
若き世代へ予言者の与えた言葉……(76)
末日聖徒イエス・キリスト教会歴史粋(14)
ジョセフ・フィルディング・スミス…(77)
アロン神権保持者は家庭訪問によって進歩する…(80)
メルケゼデク神権……(82)
ムハマッドの系図……渡部正雄…(85)
(練習の歌)……(87)
日曜学校ガイド……(88)
MIAリーダー……(92)
扶助協会レッスン……(94)
伝道本部だより ……(104)



予言者のことば

「求婚期間と結婚との理想について」

大管長　デビド・O・マッケイ

クラーク副管長、モイル副管長、ジョセフ・フィールディング・スミス十二使徒会会長を始めそのほかの教会幹部の夫妻の方々、YMMIA中央管理委員会、YWMIA中央会長会および教会に属する若人の諸君。私はこの大切な時に当って皆様に挨拶の言葉を述べると共に、このプログラムに参加された方々が寄せられた優れたメッセージに、諸君が親しく接する機会を得られたことをお喜び申します。

私の責任は「わが宗教の実践」でありますが、私はこのことを最もよく実証するのは、今夕私に割り当てられました話題である「求婚期間と結婚」をおいてほかにないと存じます。私は今夕ここに居られる若人たちのメッセージに耳を傾けて居りましたうちに、次の詩が頭に浮んできました。

「われを信ずるその人に心のまこと尽せかし
期待にそむく業をして
よきその人のまごころに
加えし傷は小さくとも
誠にそむく裏切りの
罪の深さぞおそろしき」

エドガー・A・ゲスト作

「求婚期間と結婚」という題目くらい私たちの関心を招く大切な題目は多くありますまい。

「永遠の宣言」

万物の創造が行われていたときは、人間が「死ぬべき体」をとるのに最も好都合であって、人間は「汝自ら選ぶことを許す」という永遠の御言葉を聞いたのであります。よろずの創られたものの中でもとくに人間はこのようにして「自由意志」という神の賜物をいただき、それと共に責任を引き受けることになりました。

今夕ここに集った何万という方が常に心に銘記しなければならぬ一つの原則として、今私は皆さまの一人一人にくり返して申します。

「汝こそは事を為すとも捨つるとも
思い定むるその人ぞ
先立ちて事を為すとも遅るとも
高き理想にはげむとも
安きを偸み眠るとも
思い定むるその人は
なんじをおきてほかになし」

エドガー・A・ゲスト作

主は「教義と聖約」の中ではっきりと結婚の意義を示しておいでになります「また、われ誠に汝に告ぐ、何人にても結婚を禁ずる者は神より聖職に按手聖任を受けたる者にあらず」と（教義と聖約四十九〇十五）。それでありますから、結婚は軽々しく結ぶものでもなく、いつでも勝手な時に終らせるものでもなく、また一度困難な問題でも起るとすぐに解消させるものでもありません。この回復された真の教会の会員にとって、結婚は神聖な儀式であって、聡明な父母であることによって結婚生活が正しく導かれるとき、それは人類を改善する最も安全確実な方法であります。

「愛する妻と児のために
いと幸多きだんらんの
家庭つくらむ努力こそ
人の世のしあわせと気高さを
真にあらわすすがたなる」

ロバート・バーンズ作

「結婚は万人の望み」

僅かの例外を除いて、結婚は万人の望みであります。すべての若人はいつの時かめでたく結婚をすることを待ち望んで居ります。ヘンリー・C・リンク教授はこのことを次のように確証しておられます。すなわち

「大学の学生を対照にして行われたある全国的の調査に関聯して、過去三年間のうちに私は次のようなことを若い女性たちにたずねた。すなわち、あなた方にとってどのような暮し方が人生で一番大切ですか。あなたは結婚をして夫をその暮しの中で助けることが、自分自身の暮しよりも大切であるか、大切でないか、もしくは同じであるか、どちらだと考えますか、と。

大学に籍をおく女学生の九十から九十五パーセントまでが、結婚をして妻となり母となって人生を送ることが私たちの第一の目的であって、夫をその暮しの中で助けることが自分の暮しよりも大切であると答えている。女子大学生たちの中に、家庭をつくって子供たちを育て夫の暮しの中で夫を助けるということが本来最も大切な暮し方であるという信念が生じているという事実は、基本の原則への

健全な復帰を示している」と。

私は、現在家庭生活の永続にきよう威を与えている一般的の経済変化、すなわち家庭の妻たちが共かせぎをせねばならず、母親たちは子守りに愛児をあづけて働きに出なければならないという経済上の変化があっても、今言ったような状態はわが教会の若い人々の間にひろく存在していると信ずる者であります。

私たちは、家庭こそ文化の基であるから、当教会の会員はすべて理想の家庭をつくって模範的の子供たちを育てる義務があるという基本の事実を見失しなわないようにしたい。この義務があるということを心の中に持ちながら、今私は成功した結婚の助けとなる五つの条件を一々挙げてお話いたします。

一、傷つかない名誉

将来成功した結婚をする人は、結婚の祭壇に近づく以前すでに成功の第一歩を踏み出しています。それはあなたが十代のとき社交上のパーティに出る招待を受けるときに始まり、あなたのつれに「さようなら、おやすみ」と言う態度からも始まります。「求婚期間」中にあなたの名誉を清く傷つかずに保つならば、それは幸福な家庭を築く固い基礎をつくる大きな力となります。このことは次に申上げる二人の若い女性の経験がよく物語っています。始めの一人は次のように話しました。

「十代であるということは私にとってどうしてよいかわからないことなのです。それはあんまり多くの誘惑や問題が一度にどっとおしかけてくるように思えるからです。私を大へんなやましたそれらの問題の一つというのはデートに関することなのです。私はこれまでにこの問題について大へん多くのちがった考えや説明を聞いていて、それで全くどうしてよいかわからないのです。私は、私が結婚すべき男の人に会うまで私の愛情をとっておきたいと思っています。ところが、私の友だちの五六人は、ひどく私を非難して、私が極端論者であると思っています。私はこの友だちが私に言ったたくさんのことを考えて大へん幸福でなくなりました。ですから、私は私の考えが間違っていわしないかと思い始めています。

私たちの大ていは接吻をしたり永い間体を接触させたりしているのは悪いことだと言っています。私はこうした行いに全く反対ですが、私の友だちは、男友だちが何べんも外へつれて行ってくれて面白く過させてくれたら、そのあとでは「さようなら」の接吻をして感謝の気持ちを表わすのが当然だと言います。私はこれが本当だと思ったことは一度もありません。私がデートした数人の男友だちはこれまでに大へん腹を立てて、私がその人たちを好きでないと思い、一しょに行かないかと言ってくれなくなりました。私は、私の結婚すべき人に会った時こそ、私のもっている全部の愛情を捧げたいと思っています。ですから、ほかの男友だちにも接吻を投げ与えていなかったら、その人に捧げる接吻はずっと意味があると信じています」と。

第二は、未来の夫に対して誠実であるということを信じなかった或る若い女性の話です。この女性は若い男たちの中出に従うことによってその男たちの気に入るにちがいないと思っていました。

この女性は美しくてその上着こなしも上手です。毎週の半ばにデートのないことはめったにありません。週末にひまがあったためしがありません。しかし、この女性のデートは潮のさし引きのように規則正しく行われ、それも大ていの場合一人の男友だちときまって

いません。若い男たちは、この女性サリーがお人好しだと知れわたっているということだけでデートをするのです。この女性と一しょに居ることを数回見つかると、あちらこちらと女性をわたり歩くカサノーヴァのような男だという評判が立つのです。しかし、自分自身の気の合った別の女性を見つけると、もうサリーとデートをする男はほとんどありません。この新しい女性は、それまでサリーの持っていた、人の心をひきつけるところ、当世風なところ、もしくは皮肉な意味でのあらゆる良いものを持っていないかも知れません。しかしこの女性とのデートは、一昨日フランクと仲良くしたように明日はまたトムと仲良くするような気のない、自分だけの女性であるという心持ちがするにちがいありません。

良い評判というと何か固苦しく聞えるかも知れませんが、それは大切にすべきものです。決定はあなた自身の責任です。普通の男は自分の好いている女性を決して誘惑しないものであります。

二、集団交友と社交性、十代に於ける大切な要素、第二の大切な要素は気の合った仲間を選ぶことであります。

配偶者の選択

適切な気の合った配偶者を選ぶという問題は非常に大切なことであります。「求婚期間」中に、若い人々はお互いに一しょになってお互いの気質をよく知るようになるべきであります。音楽的傾向があって楽器を奏することを習い。もしくは歌を習っている若い女性は、家にとぢこもって人と交わるのをきらう者よりも良い配偶者を見つける可能性が多いのです。

運動競技をやっている若い男性は、家にとぢこもってテレビやラジオにかぢりついている者よりも気の合った配偶者を見つける可能性が多いのです。言葉を換えていえば、交際が幸福な結婚へと導くということであって、それは若い人がお互いに知り合って選択をする一層多くの機会をもつからであります。

若い方々よ、私はここで余り早く「婚約する」ことに警告をさせていただきたい。デートが特定の人たちの間にだけ行われることでなく、またデートが社交的の会合である点から言って、更に「婚約」が結局は結婚を決定することになるであろうという点から、若い女性が「婚約」することに現在一種の安全感を見出しているということは本当であります。然しながら、余り若いうちに「婚約する」ことは、前途有望な熱情に燃える青年が蒙ってはならない不利益に満ちております。第一に、若い人たちはすぐに「身も心も捧げて」しまい易く、分別も熟していないから、魅力もしくは激情と真の讃美もしくは本当の愛情との区別がつかないかも知れません。

婚約の限界

第二に「婚約をする」ことは、青年男女がお互いをよく知り合う機会を、全くなくしてしまわないまでも制限いたします。たとえば、一晩中同じ相手とだけ踊っていることなどは舞踏場の社交精神を排斥すると言わなければなりません。しかし、余り早く「婚約者を選ぶ」ことの最も悪い点は、若い男には一種の「なれ過ぎ」もしくは「所有感」を起させ、若い女性には一種の従属感、結婚によってだけ正しく完成されるはずの有頂天（うちょうてん）の状態を起させることであります。もし一方の男性が何ものにも拘束されない向う見ずの若者であった場合には、それは結婚生活の幸福に何ら役立たない、味もそっ気もない、未熟のうちにもぎとった果物のようになってしまいます。いつの日か、あなたは自分の「婚約」が早まったものであった

ことに気がつくでありましょう。

青年は幼年時代が過ぎると、配偶者を選んだり「面白い時を過す」ほかにいろいろな義務があることにいつも意を用いていただきたい。青年はまず第一に、どのような特性を発展させるかを決めなければなりません。また、自分の商売もしくは職業をきめ、妻を選ぶこととその時期、妻子の扶養等についてきめなければなりません。「婚約をする」ことは、二人にとって魅わく的であるので、これに関聯しているいろいろの義務を忘れ勝ちなものであります。

三、結婚契約の神聖

私が幸福な結婚に役立つものとして指定する第三の理想は、当事者の一人一人が相手に対して誠実であると誓って結婚の祭壇にひざまづく時に始まります。誓約をする男がもしも正しい人であるならば、その言葉はその人をしばるきずなであり結婚の誓約もその通りでありますから、その人の署名よりも力強くしばる力があります。とくに、二人がお互いを、互いにとってふさわしい相手であることをはっきり表わして、神殿の中でひざまづくときはその通りであります。

この時、若い女性は自分が妻となる相手の男性が正しい父となるにふさわしい人であり、自分も正しい母となるにふさわしい者であることを知っておりますから、そう思うことは当然正しいのであります。当事者の一人一人が、この人にだけ身も心も捧げるのだという感情を抱くことができるのはすばらしいことであります。

愛情を分ち与えること

結婚をすると、結婚の最高の目的である子供たちの養育と子供たちに愛情を注ぐことを二人して分け合う機会が出てきます。「子供がなくては、もしくは子供が大切であるという信念がなくては、結婚は不完全であり、また結婚が真に達成されてはいない。」

全く、子供があると時間がなくなり、厄介になり、いままでよりはもっと忍耐が必要になります。子供たちがあると自由が妨げられ面白い時を過せなくなり、ぜいたくができなくなります。しかし、結婚の真の目的は子供を得ることであります。もしも父となり母となることに正しい価値を見出していないならば、私たちはその心持ちから言っても社会の一員としてもまだ結婚の用意ができていないのであります。

若い人々よ、結婚をしてから利己主義、気短か、いばること、不平等、敬まいの欠けたことなどを残しておくことはできません。結婚をしてからは、喜んで受け入れること、平等、分け合い、与えること、助けること、自分の受持ちを果すこと、学ぶこと、一しょに大声で笑うことなどが盛んにならねばなりません。

結婚の誓いの言葉を破るならば、破った人は信用されない人であることが解ります。従って「愛される人であるという賞め言葉よりも信用される人であるという賞め言葉の方がすばらしい。」

あなたが結ぶ誓約は、結婚生活の幸福にとって一番もとになる大切な要素であることをいつも心に留めていただきたいものであります。

結婚生活の要素

さて、今まで私たちは立派な結婚生活に必要な大切な要素を三つ考えてきました。すなわち㈠良い評判　㈡気の合った配偶者　㈢結婚の祭壇にひざまづくときの誓れ、であります。

四、克己自制

第四に大切なことは家庭内の克己自制であります。「求婚期間中」には隅から隅まで目をつけていなさい。しかし結婚をしたら半分目をつぶっていなさい。この言葉の意味は、夫に向って「私の料理がへたなことはよく知ってますわ。私も、あなたがいやでたまらないと同じようにそれがいやでたまらないんです。でも、いやだいやだと仰しゃることをじっとがまんしてる私が解らないんですか」と言った若妻の言葉がよく説明しているでしょう。結婚をしてから「いやだ、いやだ」と言うことは二人にとって不幸であります。賢明な夫婦は舌に手綱をつけることを覚えます。

「たこを揚げている子供はまたたぐりこむことができる。思っただけなら人知れず考え直すことができる。綸言汗の如くとかや、言葉一たび口を去ってまた帰らず」

不平が出そうになったら、外へ出て散歩することです。私は一度も夫婦げんかをしたことのない夫婦のことを聞きました。この二人は、どちらかのかんしゃくが破裂しそうになったら必らず外へ出て散歩をすることにきめていました。その夫は大ていの時間を散歩に費していました。克己自制と言いながら、タバコをたくさん用いたり、アルコール性の飲物に対する欲を抑え切れなかったりすることは、これまでそうした習慣のない幸福な家庭を不幸にするもととなり、そうした習慣がなければ有用な多くの生活を悲劇に変えているのであります。「求婚期間」中でも結婚をしてからも、タバコを用いたりアルコール性飲料を用いたりしはなりません。

五、礼儀正しいこと

第五の大切な要素は礼儀正しいことであります。「求婚期間」中には、各々相手が口に出さない先にその望みを予想することを喜び、適正な範囲に於てそれらの望みをかなえてやることを嬉しく思います。ところが、結婚の式に望んで誓約をしたら、もう「求婚期間」は終りを告げたと思っている人々が余りにも多勢居ります。結婚の誓約をすることは永遠につづく「求婚期間」の始まりでなくてはなりません。またそれは「求婚期間」中に恋人として彼女に与えたと同じ思いやりを与えることであり、たとえ夫が毎朝新聞紙のかげになって一言も出さなくとも、夫に「求婚期間」中と同じ思いやりを与えることであります。結婚後の人生は平々凡々の生活になりますが、もし私たちが、「どうぞ」とか「ありがとう」とか「ごめんなさい」とかというちょっとした言葉が、結婚後といえども、結婚前と同じように適切でありまた感謝をされるということを忘れないならばこの単調な平々凡々さが破れるのであります。

子供にめぐまれた家庭では、子供たちがお父さんがお母さんに礼儀正しくあり、お母さんがお父さんに礼儀正しくあることを見るので、その家庭の良い空気を吸うにつれて自然に礼儀正しくなり上品なそして教養のある子供になります。真の文化の本質というのはお互いに対する思いやりであるからであります。

困難な問題にぶつかったとき、借金がかさんだ上に税金も払わねばならぬとき、赤ん坊はあやさなければならず夜中にも乳を飲まさねばならぬとき、そうしたときにも結婚後の礼儀正しさが家庭の中の和合と平和を保つ上に強い力となることを忘れないでいただきたい。

礼儀の正しいことと、時間を正しく守ること

礼儀正しいことと辛抱することとは、偉大な人にとって一番ふさわしいことであります。妻子に対しては、時間を正しく守りなさ

い。もしもやむを得ないことでおくれたなら、ちゅうちょせずにあやまって事情を説明しなさい。結婚後も時間を正しく守り思いやりのあることは、同じ心の家庭にある大切な要素であります。終りにのぞんで、私は理想的な結婚式の意義をちょっと申し上げます。すなわち、結婚の祭壇の前にひざまずいている花むこは、夫として持つことのできる最も貴い財産、すなわち今心から信頼してその手をわが手の中に置いている花よめは太陽の光の如く清く白妙の雪の如く汚れがないという確信を胸の中に持っています。花むこは花よめの純さと美しさの中に神聖な母性が表われていることを確信しています。さて、青年の諸君、この確信この完全な信頼こそこの世の何ものにも勝ったものではありませんか。

これと同じく崇高なのは、花よめがその胸に抱いている確信、すなわち今自分が愛して身も心も捧げようとしている花むこは、自分と同じ純さと強い性格とをもって自分と結ばれるのだという確信であります。このような結婚こそまことに神がその創りたもうたものの栄えを表わすために命じたもうた結婚であるにちがいありません。

若い人々よ、これこそ君たちが永遠に手を携えて行こうとするとき、君たちの所有する世襲の財産であります。それでありますから君たちがこれを実現するよう、そしてこのような大切にはぐくまれた理想のもつ喜びと幸福とを見出すように、イエス・キリストの御名によって祈り奉る。アーメン。

後がき。この若い人々について強調したファイヤサイドの大演説は、一九六〇年一月三日青年の人々に対してデビド・O・マッケイ大管長が行われたものであるが、その後ハワイ、カナダおよび世界各地からマッケイ大管長のもとへ多数の手紙が寄せられて、この大演説の写しを送ってほしいと言ってきている。これらの手紙は末日聖徒からはもちろん末日聖徒でない人々からも来ていて、そのすべてが、大管長の若い人々へ寄せられた言葉が焦眉の急であることを認めている。この「求婚期間と結婚との理想について」という演説につづいて、「わが宗教の実践」という題の下に十二回つづきの放送がなされることになった。

このファイヤサイドのプログラムにこれまで参加したことのある、またはこれから参加する当教会の指導者たちの中には、十二使徒会々員ハロルド・B・リー、スペンサー・W・キンボール、ハワード・W・スペンサー長老ならびに七十人最高評議員会々員マリオン・D・ハンクス長老等の名前が見える。ラジオの放送によってこれら指導者の言葉は教会の青年諸君の耳に達する。マッケイ大管長の「ファイヤサイド」は使うことのできる最も大きな建物の中で行われ、全教会に在る約二十万人の青年男女の耳に達したが、その後行われている数々の「ファイヤサイド」は、もっと親密なことを基にしていろいろな家庭の中で催おされた。ここでは気の合った年齢層の人々が話に耳を傾け、次にその時生じたいろいろの問題を論じ合った。MIAはこの一連の催おしを成功させるために教会幹部の委員会と完全な協力をしてきている。

両親たちは各自の家庭に於て同じ話に耳を傾けているから、かくして両親とその子供たちの間に、理解と思想を伝え合う基礎がつくられている。

《伝道部長メッセージ》

伝道部補助管理委員会組織される

ポール・C・アンドラス

この度、伝道部補助管理委員会が新しく組織されたことを大きな喜びを以て発表させていただきます。この委員会は伝道部各補助組織の長と系図委員会の長とから成り、次の通りであります。すなわち、系図委員会は渡部正雄兄弟扶助協会はフランシス・アンドラス姉妹、日曜学校は上野道男兄弟、男子相互発達協会（ＹＭＭＩＡ）は佐藤襄二兄弟、女子相互発達協会は田中栄子姉妹であります。ここに挙げた各組織は以後前記指導者の指揮の下におかれ、将来大きな進歩を得られることが期待されます。

この新組織のもたらす有利な結果の一つは「聖徒の道」二月号、すなわち本誌から始めて見ることができます。この二月号から始まって、メルケゼテグ神権、アロン神権、系図および各補助組織は毎月「聖徒の道」にそれぞれの欄を持つことになりまして、これらの組織に関係のあるすべての指令は、以後「聖徒の道」のそれぞれの欄にあらわれます。従って「ブランチ・ティーチング・レッスン」、「日曜学校ガイド」、「ＭＩＡ指導者」等はこれまでのように別々に発行されずに、その資料が「聖徒の道」に掲載されます。この新しいとりきめの利益は明瞭であって、確かに一歩前進であります。

千九百六十年は、教会のいろいろな組織の責任を日本人会員に持ってもらうことによって、相当な進歩を見ました。従って、千九百六十一年中には、この線に沿って、更に大きな進歩すら為されるにちがいないと思います。

「聖餐の律法」（二十一）

佐藤龍猪

またパンを取り謝してさき、弟子たちに与えて言いたもう「これは汝らのために与うるわが体なり。わが記念としてこれを行え」。夕餐ののち酒杯をも然して言いたもう「この酒杯は汝らのために流すわが血によりて立つる新しき契約なり」。

ルカ伝第二十二章十九・廿節

一、聖餐の律法

千九百三十年四月、教会の組織管理に関して賜わった啓示の中で（「教義と聖約」第二十章七十五―七十九節）、主は「会員はしばしば会合してパンと葡萄液とに与り、主イエスを記念するは必要なり。而して長老または祭司、この式を執行すべし。而してその式、作法次の如し。すなわち、その時彼は教会員と共にひざまずきておごそかに祈り、父なる神の御名を呼び奉りて言うべし。『永遠の父なる神よ、われら御子イエス・キリストの御名によりて願い奉る。ここにこのパンをいただくすべての人々が、御子のからだの記念にこれをいただくよう、また喜びて御子の御名を受け、御子を常に忘れず、またその下したまえる誡命を守ることを永遠の父なる神の御前に証明し、かくして御子の「みたま」常に一同と共にましますよう、このパンを祝いきよめたまえ。アーメン』と。葡萄液を頒つ時の方式は、すなわちさかづきをとりてまたかく言うべし。『永遠の父なる神よ、われら御子イエス・キリストの御名によりて願い奉る。ここにこの葡萄液をいただくすべての人々がかれらの為に流したまいし御子の血の記念にこれをいただくよう、また御子を常に忘れぬことを永遠の父なる神の御前に証明し、かくして御子の「みたま」一同と共にましますよう、この葡萄液を祝いきよめたまえ。アーメン』と言って、教会員が「しばしば」相集って聖餐の式を挙げるよう命じたもうた。末日聖徒イエス・キリスト教会では、いろいろの儀式を執り行う際に宣べる言葉を一般に規定してないが、聖餐式に於けるこの祝禱の言葉と、バプテスマの際に宣べる言葉（「教義と聖約」第二十章七十三節）とは、啓示にあらわれた主の言葉通りに一言一句相違なく宣べることになっている（「信仰箇条の研究」百九十三頁および二百三十八頁参照）。

始祖アダムが「律法を破り」主の居りたもう所から締め出された後、主はいけにえを捧げる律法をアダム、イヴに与えて「このいけにえを捧ぐることは、御父の生みたもう恩恵と真理に満てるただ独りの御子がいけにえとなりたもうことのひながたなり」と天使をして言わせたもうた（「高価なる真珠」モーセの書五〇五―七参照）。

従って、ここにあらわれた主の目的は、後になってキリストがこの世へ来りたまい、そのぎせいによる贖いの力と復活の力によって全人類が神の御国に於て永遠の生命に与ることもできることを思い起させることであった。この理由で、アダムとその子孫とは代々

いけにえを捧げる律法を守り、「堕落」から「贖われ」、死から生命へ「回復」される道が与えられる時を待ち望んできた（ジョセフ・F・スミス大管長「福音の教義」二〇二頁参照）。

彼らは羊の群の中からきずのない初子をとって、これをいけにえとして神に捧げるのを習いとした（「高価なる真珠」モーセの書五〇五参照）。またイスラエル人はエジプトから導き出された時にあらわれた主の御力を記念して、年々「過越の祭」を執り行い、その時一つの小羊をとりこれを過越の獣としてほふりいけにえとして主に捧げた（出エジプト記第十一章・第十二章参照）。このいけにえもまた「きずなき、しみなき」完全ないけにえとして神に捧げられる十字架上の贖い主をあらかじめ示すひながたであった（「救いの教義」第二巻三三九頁参照）。

このようにイスラエル人はエジプト出国の時以来、一年のうちの或時を期して毎年「過越の祭」を守るように命ぜられていたが、イエス・キリストは自らが十字架に上る前の夜、この儀式の代りに聖餐の儀式を与えたもうた（ルカ伝第二十二章、十五—廿節参照）。

二、聖餐の表象

イエスは聖餐の儀式を制定するとき、自分のからだと血の表象としてパンと葡萄液とを用いたもうた（マタイ伝廿六〇廿七—廿九、モルモン経、ニーファイ第三書十八〇一—八参照）。特にニーファイ第三書第十八章二十八節では「わが肉の（しるしなるパンと）血（のしるしなる葡萄液）とをわかち与うる時に」と明瞭に言ってある。ブリガム・ヤング大管長は「私は、キリスト教界でこれまでこの問題について説教に次ぐに説教が行われているにかかわらず、今なおこの表象について人々が信念を異にしていることを知っている。キリスト教界の母なる教会は、パンが真実キリストの肉となり、葡萄液がキリストの血となると信じているが、これは私にとって途方もない不合理な考えである。パンはパンであり、葡萄液は葡萄液である。さりながら、パンも葡萄液も、祝福の言葉によって、これをいただく人々の身も霊もふたつながらに益を与えるのである。しかし、主イエスを信じて従う者たちにとっては、キリストの死と苦しみを表象するパンと葡萄液とを単にいただくこと以上のことが要求される。すなわち、主の要求したもうところの誡命に厳密に従わねばならないということがそれである」と言って居られる（ブリガムヤング大管長講話録一七二頁参照）。

キリストはその啓示の中で（「教義と聖約」廿〇七十五）、会員がしばしば会合して「パンと葡萄液と」に与るようみこころをあらわしたもうた。しかし、主は千八百三十年四月予言者ジョセフ・スミスに賜わった啓示の中で「汝ら聖餐に与る時、もし汝ら誠心よりわが栄光のためにこれをなさば、すなわち汝らのために葬られたるわが体と汝らの罪の赦しのために流されたるわが血とを父の御前に記念してこれをなさば、汝ら何を食し何を飲むともあえて差支えなし」と仰せになった（「教義と聖約」二十七〇二参照）。末日聖徒イエス・キリスト教会は、これに従って現在に至るまで「パンと水」とを聖餐の式に用いている。これについてブリガム・ヤング大管長は「古代のイスラエル人はパレスチナの土地に居たとき、われわれのように水晶のような清冽な水を豊富にめぐまれていなかった。古代のイスラエル人は多量の葡萄液（もしくは葡萄酒）を飲用する習わしであり、この習慣は

パレスチナの地にのこっているイスラエル人の中に現在まで行われていると思う。それはまことに葡萄液（もしくは葡萄酒）の国である。しかしながら、主は誠心より主の栄光のためにするならば、聖餐に与ると（あずか）き何を飲んでも差支えない、それは主に受け入れられるのである、と仰せになった。それで、われわれはあたかも葡萄液であるかのように水を用いている」と言って居られる（ブリガム・ヤング大管長講話録一七二頁参照）。

三、聖餐の目的

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」（ヨハネ伝三〇十六）。救い主の愛もこれに劣らず大きかったから、ひとりのこらずの人を復活させ、救い主の福音を信じて従う者に永遠の生命を与えるために、喜んで苦しみを受け命を捨てたもうた。

「すべてを贖うために」なさったこの無限の愛の行いを記念して、キリストの御名を口にする者は、その感恩の念をあらわし「主がこられる時に至るまで、主の死を告げ知らせる」（コリント前書十一〇二十六）ために聖餐の儀式を守るのである。

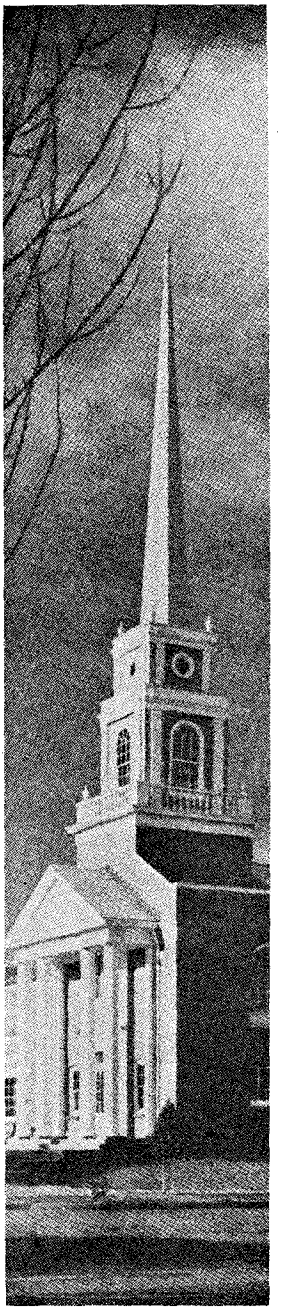
しかしながら、聖餐の儀式はそれ以上の意味を持っている。われわれはパンを食べ水を飲む毎に次のように誓約する。すなわち、

㈠御子イエス・キリストのからだを心に憶（おも）えて食し、十字架の上で裂かれた御子のからだのことを忘れない。㈡世の人々の罪のために流したもうた御子の血を心に憶えて飲み、十字架の上で流したもうた血のことを忘れない。㈢喜んで御子の御名を受け、御子を常に忘れない。すなわち御子の御名によって呼ばれ（クリスチャンと言われ）、その名前を辱かしめるようなことは一切しない。㈣御子の与えたもうた誠命をすべて守り、「神の口より出るすべての言」を喜んで実行する。（「救いの教義」第二巻三四四頁参照）。

われわれは、この誓約をするために毎週集って救い主の体と血の表象（しるし）であるパンと水とに与り（あずか）、救い主を忘れぬこと、救い主の御名を喜んで受けること、救い主の下したもうた誠命を守ることを証明する。われわれは、この誓約を毎週「新たにする」（renew）ように要求されている。その通りにするならば、常に主の「みたま」が共に在りたもうて導きを下さると約束がしてある。その通りしないならば主の「みたま」の導きを得ることができない（「教義と聖約」二十〇七十七―七十九、「救いの教義」第二巻三四五頁、ヨハネ伝六〇四十八―五十七参照）。

聖餐式に出席する第一の理由は、パンと水とをいただいて誓約を「新たにする」ことである。聖餐に与るときに、前に述べた誓約の一つ一つを充分に理解し、しかも毎週その誓約を「新たにする」人は、自分が毎週主と聖徒たちの前で誓約をしたことを心に生き生きと憶えて、主の下したもうた誠命を破ることはできないにちがいない（「救いの教義」第二巻三四六頁参照）。

ともに考えよう



祈りについて

立野嘉久
（群馬支部）

祈りと言うものは簡潔、誠実、正直かつ謙遜である事が最もふさわしいのであるが、私たちはあまりにも祈りの外面ばかりにこだわり過ぎて、御父なる神に祈りを捧げると言うその根本的な目的を忘れていないだろうか。

アレキサンドリアのクレメントは、祈りは〝神との会話〟であると言いました。これは神との交わりは真実の精神を示すものであるからです。ニーファイ第二書三十二章八節に「あなたたちがもし祈らねばならぬ事を教える『みたま』の言葉に聞き従うならば、あなたたちは祈らなくてはならない事を覚えるであろう。悪魔は祈れと人に教えず、かえって祈ってはならないと教える」と書かれています。神の御霊を完全に享受する為には、神と交わる方法以外に良い方法は一つもなく、真に人の成長、進歩の発展の助けとなるものの中で、神と語る事より大なるものは他に有りません。祈りを形式化してしまうのは大変容易な事です。正直な祈りは宗教生活の一部だが御神を崇拝するという考えを持った生活の代理には決してなりません。

それでは私たちの祈りはどうあるべきだろうか。救主イエス・キリストはマタイ伝六章の九節から十三節に『天にいます我らの父よ、願くは御名の崇められん事を。御国の来らん事を。御意の天の如く地にも行なわれん

事を。我らの日用の糧を今日も与え給え。我らに負債(おいめ)ある者を我らの免したる如く我らの負債をも免し給え。我らを試みに合わせず悪より救い出し給え。国と栄光と力とは限りなく汝のものなればなり。アーメン。』と私たちの為すべき祈りについて模範を示されました。これによりイエス・キリストは私たちに祈りをする時には、少くとも次の三つの事柄を述べなければならない事を教えています。第一に主なる神を崇拝する事。第二に私たち自身の為に主のみに与えたもう祝福を願う事。第三に自分に祝福を願う如く、隣人にも祝福のある様に願う事であります。そして、祈りをすると言う事は、出来るだけ神の側に居りたいという気持から生ずるものであり、これは私たちが御父に大きな愛を持っているあらわれです。例えば私たちが自分の愛する両親との交わりを尊重する様に、心から愛する父なる神との交わりを尊ぶのと同じです。故に現実に神の側に在ると自ら感じる事は、それ自体私たちの霊的な必要を満すものであり、これは単に形式に頼らずに祈りを神に捧げるべきだという理由です。従って私たちは神に対して誠実且つ正直に祈るべきであり、心からの祈りであるならば、必らず誠実且つ正直な祈りになる筈です。又私たちが祈りをする時には謙遜である事が必要です。何故なら神の御前で自分が何が何であるか知らないのでは、神を崇拝する気持には決してなれないからです。神のみが私たち自身の罪や欠点や負債(おいめ)をお許しになるという事を認め、悔改めの態度を絶えず示すべきであり、私たちの心は絶えず祈りの中にあり、心からの願いは発する言葉や経験する感情に伴うものでなければなりません。〝二十の説教〟の書物の中で、「安楽な生活を求めんとして祈ってはならない。より強い人間になる様祈りなさい。自分の力にふさわしい仕事をお与え下さる様になど祈ってはならない。自分の仕事にふさわしい力をお与え下さる様にと祈るべきである」と書いてあります。もし私たちが仕事にたずさわる時に経験する苦労や問題を神が取去ってしまったならば、直ちに私たちは成長と発展の機会の大部分を失ってしまうでしょう。故に私たちは日常の仕事や人生それ自体を成功せしめるのに必要な力が聖霊を通して神から与えられるものである事を忘れてはなりません。私たちが日常の仕事にたずさわる時には、人生の祝福である健康と力、喜びと成功とを絶えず与えられん事を神に祈る必要があります。またヤコブ書一章六・七節に「ただし疑う事なく、信仰をもって求むべし。疑う者は風に動かされて飜る海の波の如きなり。かかる人は主よりは何物をも受くと思うな」と祈る時は、常に信仰をもって祈るべきだと教えています。同様に愛する者の為に、主の祝福ある様祈る時も信仰をもって祈る事は当然です。ヤコブ書五章十三〜十六節に「汝等のうち苦しむ者あるか、その人、教会の長老たちを招け。彼等は主の名により其の人に油を塗りて祈るべし。さらば信仰の祈りは病める者を救わん。主、彼を起し給はん。もし罪を犯しし事あらば赦されん。この故に互に罪を言い表わし、且つ治されん為に相互に祈れ、正しき人の祈りは働きて大なる力あり」とヤコブは自分の為より他の人たちの為に絶えず祈る様励ましを与えました。心からの誠実な祈りは、日々の行ないと感謝との気持により支えられる時のみ可能である事はアルマ書三四章十七〜二九節にわたって書いてあります。これを読むと救主イエス・キリストの教えに従う時、神を愛し、隣人を愛する事が如何に大切か痛切に感じられます。

それでは私たちはどの様に祈ったら良いかもし真実の祈りが言葉に出されずになされる

としたら、人の耳に聞える様に形式ばる必要はありません。しかし、個人的な祈り以外は当然形式的になるのはやむを得ません。定められた形式的な祈りにはバプテスマと聖餐式の時の祈りだけですが、声をあげて主に祈らない時であっても、自分の周囲の人々の為を思って祈るべきであり、祈りに欠くべからざるものは言葉ばかりではありません。祈りは習慣的なものであり、神との交わりであるから、私たちが祈りをする時は、常に私たち自身の態度に気を付けなければなりません。それは神が常に私たちの行動の全てを見守って居られるからです。この事は、私たちが絶えず意識しつつ形式的な祈りを捧げるべきだという意味ではなく、常に心の中の事を声を出して言い表わす時に、その心の思いが不適切であってはならない事です。

私たちが生活を営む時には必らず神の特別な祝福を必要と感じる時がやって来ます。病気や死や経済上の逆境が私たちを苦しめる時、私たちが必要以上に、この様な人生の逆境に対抗する為に、神に頼よろうとします。従って私たちの幸福や私たちの生活自体も本当の意味で神から与えられた賜であります。R・M・ミルネスが「祈りに己の霊魂を没頭せしめた人は如何なる苦悩にも静かに耐える事が出来る」と〝ラビアの言葉〟という書物の中で言っている様に、私たちが祈りが特別な折に発生する苦脳から抜け出そうと云う時のみに使われる最終的な寄り所であると云う様な誤った考えをもってはなりません。しかし、私たちの祈りは、いつも答えられているだろうか祈りの全ては答えられないと信じている人がありますが、それは、ある祈りは容易に認められ且つ肯定し得る答で答えられるけれども、その反対に否定の答で答えられる場合もあります。何故なら、それは、その願いが祈る人にとって有害だと思われた時に、神はその願いを拒絶されるからです。〝アントニオとクレオパトラ〟の中で「無智であるが故に、知らず知らずの中に、しばしば自己に害となるものを願い求めている。しかしながら、賢明なる神は、我々に益あるものが何であるか知り給い、我々が害あるものを願い求める祈りをなす時には、我々の為を思うてそれに答え給はない。この事が実に我々にとって大きな利益となるのである」と書かれています。確定的な答えが私たちの願いにそわず、はっきりした答の与えられないと思われる時、時を待つという事が何故私たちの祈りが明確に答えられなかったかという理由を知り、反省する最も良い方法になるからです。以上により、祈りと云うものが如何に宗教生活に欠くべからざるものであるか、理解出来ると思う。この話を閉じるに当って、もう一度祈りとは神聖なる「神との会話」である事を深く胸に刻み、祈る時は簡潔、誠実、正直且つ謙遜な態度で祈る事をはっきり認識する必要があります。最後に神の真実の教会は、この末日聖徒イエス・キリスト教会のみであり、神は本当に生きて居られる事を私は心から確信しています。

（学生二十一才）

（家族とともに祈ろう）

二分半の話から

ささやかな願い

林　満喜子
（仙台支部）

春夏秋冬それぞれの季節のよさはありますが、私は、秋から冬にかけての時期が一番好きです。木の葉の落ちるなにかものさびしい、センチメンタルなものを好むのでありません。高く晴れた空、暖かい日ざしを浴びて、冬のために障子を張りかえたり家族のためにあみものをしたりすることに、主婦としてのささやかなしあわせを感ずるのです。本当に平和で、静かです。天国とはこのように平和なものではないかしらと思われます。

近ごろの世の中は本当にさわがしい、落ち着かない世の中です。ことに若い人々の犯罪の多いのにはびっくりさせられます。きのうまでは自分たちと同じような生活をしていた人々がなにかのチャンスで一躍有名となり、世の人にもてはやされ、またたく間に立派な家を建て、車を乗りまわす時代です。そして自分たちもなにかそのようなチャンスに恵まれるのではないかしら、そのような生活がすぐそこまできているのではないかしらと思っている人々が多いのではないでしょうか。そしてそれがなかなか思うようにいかないとき、いらだたしさのあまり、つまらない犯罪へと追いやられるのではないでしょうか。けれども私たちには私たちの世界があるはずです。車には乗れなくても、立派な家には住まなくても、平和で幸福な生活があるはずです。

私は一日一日を大切にし、自分自身悔いのない生活がしたいと望んでおります。「さいわいなるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり」。この聖句は、私の一番好きな聖句です。謙遜な心の持ち主になりたいとは、私の最大の望みです。

また新しい年を迎えました。ことしこそは主人も教会の会員になってほしい、そして家族そろって健康であるように、私自身つねに謙遜な心の持ち主でいられるように、そして家族三人そろって教会へ行くことができるようにと祈りましょう。そしてことしもまた、この広い世界の一隅で、冬はこたつにはいって夏のためにレースあみをし、春になればワラビのおひたしをつくり、夏をめざして子どものためにミシンをふみ、イチゴのジャムもびんにつめて戸だなの中に並べましょう。秋になればまた障子を張りかえ、白菜とたくあんをつけて、クリスマスにはケーキをつくり、静かにお祝いをするでしょう。そのころには主人のもらったボーナスも軽くなって、どうしてこんなに使っちゃったのかしらと、頭をなやますことでしょう。小さいぜいたくを許されるなら、四季おりおりに新しい帽子と手袋とを買って、おしゃれをしましょう。特別になんの変化もない毎日です。ちっとも進歩のない、つまらない生活だという人もあるでしょう。だから日本の主婦は向上しないと、しかられるかもしれません。けれども私は、このような生活を大切にしたい、この平凡さをこわされたくないというのが、ささやかな私の願いなのです。

松本―ソルトレーク
結ばれて二年

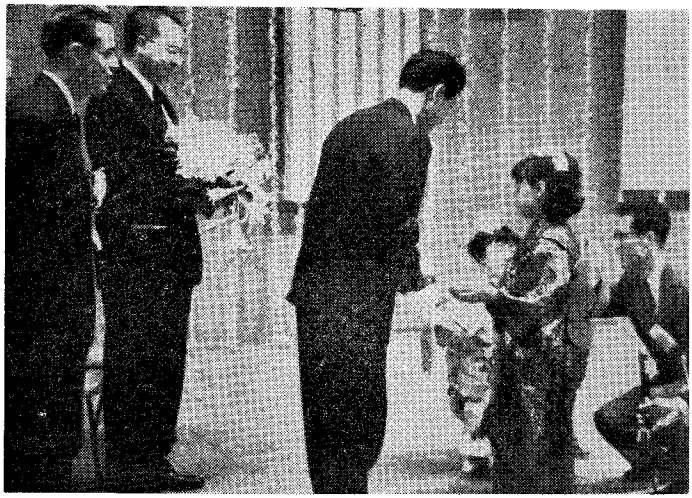
―姉妹都市締結記年祝典―

日米修好百年を祝して、松本に於ても去る十一月二十六日、ソルトレークと、松本との姉妹都市締結二周年記念祝典が市民会館にて催されました。祝典は各方面の代表者の方より、メッセージがあり、松本市長の締結宣告によって姉妹都市の結び目を堅くしました。この祝典に、当時、松本支部の支部長アンダーウッド長老とオーシマ長老が招待され、在日アメリカ人代表として、可愛らしいお嬢さんより、万雷の拍手のなかで花束をうけ、街を花いっぱいにする会より花の種をうけて、カメラマンのフラッシュをいっぱいに浴びました。当夜のテレビニュース、又翌日の新聞、ラジオで広く報道され、両宣教師の名前も何度も繰返してきかれました。更に記念祝典の講演に於いて、日米両国の姉妹都市締結に多大な功労をなされた、ジャパンタイムスの渉外部長でおられる村山氏は、みたままのアメリカについて又、ソルトレークシティ近郊と市民の様子をお話になり、続いて新聞社社長且つ市会議員の下条寛一氏が今夏、教会の本部を訪れて大管長会とお逢いして話をなされており、モルモンの民の開拓精神の偉大な事、神殿やタバナクル、有名なパイプオルガン等の建造物のすばらしさ、そして現在ソルトレークに住むモルモンの民の生活態度等、諸々の事に於いて賞讃の言葉をもって述べておりました。今改めて、アメリカにおけるモルモンが、多くの人に感動を与える民であると云う事を知る事が出来ました。当日の記念祝典は才能教育を受けている小学生によるバイオリンの演奏、又舞踊の披露、最後に、日米修好百年の歩みの映画をもって終りました。この日と前後して、記念事業の催物が、レコードコンサート、映画会、ソルトレーク児童の絵画展、及び十二月二日にはユタ大学演劇クラブはリー博士夫妻を団長として一行二十名によって「くたばれヤンキー」を大熱演し、英語劇であっても、ジェスチャーたっぷりの演技によって又、音楽を入れての演出に、会場を埋めた多くの学生の笑いと拍手の中で二時間もの長きに亘って演じられた。演劇クラブのメンバーの半数がモルモンであり、リー夫妻もモルモンとして、私達と親しく話され、眼前にアメリカのモルモンとまみえる事が出来ました。特にそのメンバーのなかに、以前日本に伝道されたペクストン兄弟がおり、流暢な日本語をもって挨拶されて、観衆を驚かし、それと、まもなく日本に伝道が予定されておられる兄弟をも見出

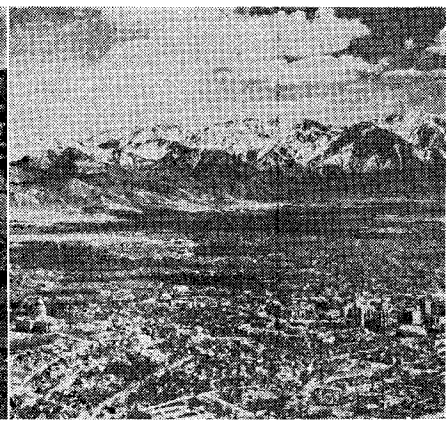
す事が出来ました。

当松本支部も一同が、日本に於ても、私たちも良きモルモンになるように、全ての人から認識される様な民になろうと頑張っております。

（松本支部　児玉記）



日米修好百年記念祭典



比較してご覧下さい。左が松本市，右がソルトレーク市です

原稿募集

聖徒の道は、あなたの豊かさとともに、成長するものです。

どうぞ積極的にご投稿下さい。

◇信仰と証詞に関する体験について。

◇「ともに考える」ための主題を選んで、あなたの考えを素直にのべて下さい。

◇二分半の話から、模範的（時間内容ともに二分半の話にふさわしいもの）なものをお待ちします。

◇支部、地方部のたよりをぜひぜひ、忘れずに（支部のどなたでも結構です）

◇十代の人の証詞、意見、声をどうぞお聞せ下さい。

◇若き世代に与える、両親、指導者の言葉をもお待ちします。

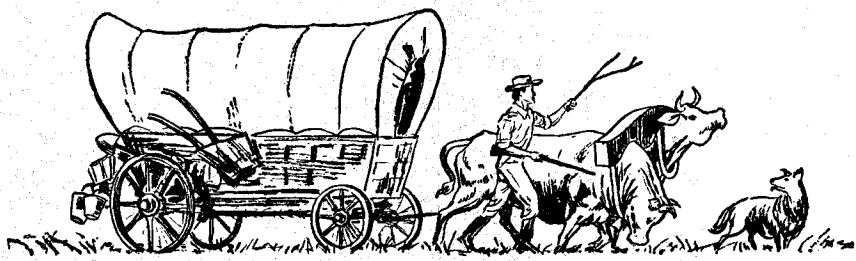
◎年令、姓名をはっきりと、原稿用紙四〇〇字詰を使って、毎月十日まで、伝道本部聖徒の道係りへ、写真、カットも出来たらご一諸にお送り下さい。

＜求道者のためのよみもの＞

ユタ物語

（5）

リーヴアイ・エドガー・ヤング
（七十人会最高評議員会々長）



ソルトレーク市が建設されてから間もなく、ジェームス・ブラウン大尉によって数哩北方にオグデン市が建てられた。彼は一八四一年にスペインがマイルス・グッドイヤーに許与したグッドイヤー要請として知られている処を買ったのである。オグデン市は一八五一年二月六日に成立したのである。そしてその成立当初から学校教育制度に就て明確な計画を持っていた。早期の領地内の各市の場合と同様に学校は市民税によって維持された。早期の学校に就て一人の開拓者は次のように言っている。（ロレンゾ・D・ヤングの日誌より）〝私たちは私たちの学校を維持する為にあらゆる犠牲を惜しまなかった。私たちが蒔きつけの為に地を耕してから先づ考えたことは、私たちの子供の教育であった〟

一八五一年に広野を越えて、この領地に牛車隊によって最初の大きな文庫がもたらされた。それはニューヨーク市に於て、ジョン・M・ベルンヒゼル博士によって購入されたもので素晴らしい蒐集であった。その中には、シェクスピア、ジュヴェナル、ミルトン、バイロン、ホーマー、ヴァージル、ソフォクレス、プラトー、ゴルドスミスその他世の主だった人たちの最上の作品が含まれていた。科

学面では〝ニュートンの原理〟ハスケルの〝天文学概観〟及び、ヴォン・ハムボルトの〝宇宙〟哲学面に於ては、ジョン・スタートミル、マルチン・ルーテル及びジョン・カルビンの世界をも包含していた。開拓者たちは週に一度地方部の集会所に集って、これ等の書物から得た思想に就て討論するを習慣とした。開拓時代の日誌や記録から、当時の人々は大いなる読書家であること、それはとりもなおさず高い教養と思慮のあった人だちであったと言うことが伺えるのである。

○手車隊

一八四九年にヤング知事は、ソルトレーク市への入殖者を援助する目的を以て長期開拓資金を設置した。最初の五ヵ年間に三万五千弗の資金が出来、数百の入殖者たちが広原を横断するのを援けた。けれどもミズーリ河からユタ迄、一千哩以上もの道程を、如何にして貧しい人々をつれて来るかと云うことはいつでも問題となったのである。毎年ヨーロッパから数年の人々がブリガム・ヤングの指揮下に加わったのである。実際に於て一八五五年迄にユタは人口の飛躍を見たのである。その社会は非常に国際性を帯び、いろいろな階層の人々が新しい領地の産業、社交、教育各方面の建設に強力なる貢献をしたのである。荒野に挑戦して新しき住家とし、アメリカ荒原開拓に挺身参加すると云う秀れた血気がヨーロッパ人の中に流れていたのである。一八五五年に開拓資金は涸渇してしまい、ヤング知事は入殖者たちをして手車を以てその荷を運び徒歩で横断させる計画をしたのである。一八五六年に一千三百人の人が五つの組に分れて、所謂手車隊としてモルモン街道に送られたのである。百人に対し五つの天幕と二十台の手車と三頭の牛にひかれる一台の幌車が割当てられた。天幕や共有の支給物は幌車につめこまれたが各家庭は自身の配給品や病人や孤独者の割当をその手車に載せ、女や子供はよちよち歩きから老人に至る迄、疲れた歩み（三ヵ月間の徒歩）をウインター・クオーターから盆地迄続けたのであった。

最初の組は一八五六年の夏に、ミズーリ河を出発した。彼等は悲劇的な経験をしたのである。秋早く訪れた暴風は、また広原にある彼等を襲い、まだ遠く盆地に達しない彼等は非常な苦しみを受けたのであった。夫たちは彼等の妻たちを広原に埋葬し、又妻たちはその夫たちを地に横えたのである。寒風の吹きざらしの天幕の中で赤坊が生れて行った。ブリガム・ヤング知事はソルト・レーク市から食糧、幌馬車、毛布、馬を装備した救援隊を派遣したのである。

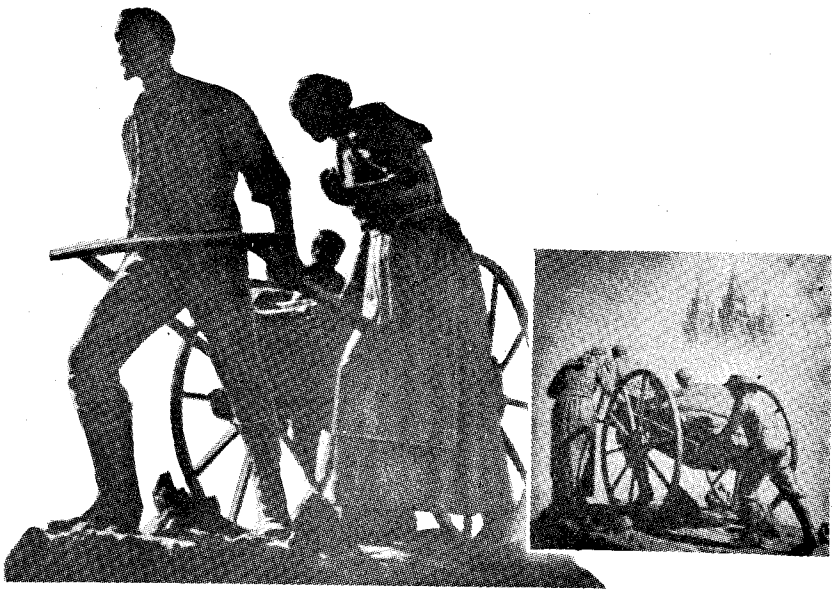
大部分の人が救出されて、安全に盆地に運ばれたのであった。一八五六年から一八六〇年迄に約四千人の人々が手車隊として広原を横断し、時によっては彼等の困難、苦しみは非常なものであったが、彼等によって素晴らしい農夫、職工、教師、商人等が新領地にもたらされたのである。手車隊の西方移住は、アメリカの歴史に於て、広原に文明をもたらした最も重大な事項として輝かしい頁を飾っているのである。

○アメリカ合衆国軍、ユタへ到来

一八五七年から八年にかけて、ユタの人民とアメリカ合衆国政府との間に誤解があり、それが終局に於て展び行く殖民地に好結果をもたらし、国民自身がユタの人民の困難な状態を理解したのであった。誤解の原因は容易に追求出来た。一八四九年にユタの人民は州設置を要請した。当時の国民は州政府はアメリカの共和国として、はっきりとアメリカの政体を形成して居らねばならないと認識していた。領地はワシントン政府によって治められていた。公務員はすべて任命され、人民は

これに対し何の発言権もなかったのである。ブリガム・ヤング知事の後、一八九六年、ウエルス知事が最初のユタ州長官として選ばれる迄、一人も現地出身の知事は任命されなかったのである。この結果、アメリカ政府とユタの人民の間に、しばしば誤解を生じたのであった。時によっては知事は経済的、社交的又知的に生活程度の高い社会から来たので新領地は彼等にとって、生活しにくい処であった。人民はその全勢力を土地に注ぎ、或人たちが彼等に求めた。文化生活に耳を傾けようとしなかった。又ユタの人たちの側にも外来者にとっては奇異な律法と習慣があり、その結果、社会的、政治的紛争が生じたのである。一八五六年に人民は合衆国政府の公文を焼却したと告訴された。彼等はこれを否定し、一八五七年に、ジョルジャ出身のアルフレッド・クミングがユタの知事に任命された時、ジェームス・ブッチャナン大統領は、新任知事護衛の為、アルバート・シドニー・ジョンストン指揮下に軍隊を派遣したのである。人民はこれを聞いて彼等自身又家族の為に恐れたのである。エコ（山彦）峡谷で軍隊と開拓者たちの間に或衝突を生じたが、遂に軍隊は、ソルトレーク市に進入したのである。けれども住民はその家を捨て去って遙か南方に逃避していたので彼等は荒漠たる市街を見たに過ぎなかった。人民は侵入者によって破壊されるよりも寧ろ自らその市街を焼払おうとしたのであった。けれども平和が成立し、クミング知事は就任し、合衆国軍隊はミズーリ河に戻ったのである。けれどもこの軍隊が進入したことは人民にとって祝福であったことが証明された。彼等は兵士たちから馬や馬や幌馬車などを購入し、又ベーコンや靴やソックスなども手に入れ、社交面に於て人民は兵士たちによい印象を与えたのである。一人の兵士が彼の日記の中に次のように記している。

—未完—



証詞（あかし）はいかにして生ずるか

ステフェン・L・リチャーズ長老

証詞はいかにして生ずるか。証詞は大論争の結果生ずるであろうか。証詞の基となる智識がなくてならないことは本当であるが、理論的方法のほかに何ものかがまた必要である。何年も前のことを思い出すが、一人の青年弁護士が私のところへ訪ねてきた。私も昔弁護士をやったことがある。この青年は末日聖徒イエス・キリスト教会へ加入したいと申し出た。そこで私は、それは結構なことである。君のような好い青年に私の教会へ入ってもらうことは嬉しいけれども、一たいどうして君は私の教会へ入りたいと思うのか、とたずねた。

するとその青年は「ええ、実を申しますと、私はあなたの教会の会員である一女性と結婚をしたいのでありますが、その女性が神殿で結婚ができなければいやだと申しますので、聞いてみますとあなたの教会の会員にならないと神殿へ行けませんので、それで」と言った。そこで私は言った「いやそうですか、私がこの教会について君に教えることのできるすべては、君はこれを合理的と思うにちがいない。また君がこの福音について回復された通りに話をされるときには、福音を貴び福音を敬うにちがいない。しかし、この教会に入るためにだれも一人のこらずもたなくてはならぬものが一つある。それは理知で得られるものではない。それは証詞（あかし）と言うものである。そして、その証詞は理論的の方法によって得るものではなくて、人がひざまずいて神に祈り、全心を主にかたむけ、主にその御業が真理であると言う感銘と智識とを与えたまえと願うときにはじめて得られるのである」と。

この時、この青年は非常に驚いて、実は誰でも自分から教会に入れてもらいたいと言ったら、教会に入れてもらえるものだと思っていたと言った。そしてこの青年は証詞を与えられるようにひざまずいて祈りよくよく考えることをしなかったから、私の言ったことを聞いて非常にがっかりしたのは言うまでもない。かれは二度と私のところへ来なかった。かれは後に金持になったが、謙遜の徳をもたなかったので天の宝を得ることはできなかった。謙遜の徳とはすなわち今日ここで私が耳にしたいろいろの証詞がそれである。

兄弟姉妹よ。あなたがたはその証詞こそ今日世界で最も必要なことであることを知っておられるか。今日世の中には自己満足をしている人々が非常に多い。これらの人々は自分たちの造り主に自ら進んで頼ろうとはしない。これらの人々は、自分のもっいろいろな問題を解決するのに充分な精神力があると思っている。世界中の政治家連さえも自分らの外交的策動や経験を以てすれば世界の諸問題が解決できると思っている。しかし私は、かれらの中で進んでひざまずいて神に助けを祈り求める者はほとんどないと思う。従って私は世の人々がかれらの謙遜と信仰と主を信頼することによって、自らを平和に価する者とするまでは平和がありそうもないのである。

（チャーチ・ニュース千九百五十四年十月号より）

光を再びうけた頃

═══モルモン教会の日本伝道再開を顧みる═══

高木冨五郎

Ⅱ

四

その頃の会員といえば全国を通じて一六〇人あまりであるが、相互に相識っていたものは奈良兄弟を中心に二〇人足らずの極く少数で、その大部分は海外へ出向した者、住所移動した者などで生死のほども判明しない状態にあった。けれども伝道事業は本部が出来て宣教師が来日すると日とともに活発となり、一方においては旧会員を探し、他においてはあらゆる方法で集会に家庭訪問に、街道伝道にと真理の光を日本国内へもたらさんものと活動をつづけ始めていたのである。

五反田の日曜学校は個人宅を利用していたので手狭であった。そのうちに荻窪のクロバア英語学院を借りて日曜学校を開くようになった。荻窪あたりには古い信者も居ったので比較的馴染み深い土地柄ではあったが、それよりも宣教師たちの熱心な活動が実を結んで集まる求道者数も三〇人五〇人と漸増する傾向にあった。その後来日した宣教師は十一人で合計十六人になっていた。ただ私にとっては浦和の自宅から荻窪の教会まで一時間半もかかることが一寸つらかった日曜の行事であった。

七月十一日の日曜に伝道部長から「しばらく教会の仕事を助力して欲しい」との話があり、私は非専任宣教師に聖任され、テッド・プライス長老のコンビとなって信者や求道者の家庭訪問をやるように依頼された。まだ日本伝道部にはテキストも組織も出来ていない時であるから、私たちはプライス長老がハワイから持って来た調査表に従って東京中を駈けまわって家庭を訪問し、伝道部の再開されたことをPRして歩くより仕方がない。暑い真夏の都会をプライス長老の誠意ある信仰心に引き廻されて毎週月、水、金の三日間夢中になって電車を乗りまわしたことを今でも昨日のように思い出される。

午前に新宿駅のホームで二人は落合うことになっていた。其日のスケジュールは其の場で相談をして目的の家をきめる。行って見ると調査表が古いので目的の家が戦災で焼けてしまったり、何所かへ引越しで、中では引越先が判らないものもあったし、また会員のうちでは既に死亡したものもあった。それでも二人は根気よく探し歩いたものだ。一九四八年の私の日記には家庭訪問したそれらの家を次の如く記載してあった。

七月十二日。大森山王に三名、中延、桐ケ谷

十四日。新宿、四谷、神田、小石川表町、大塚坂下町、十条

十六日。荻窪、阿佐ケ谷、中野、西郷、桜上水

十九日。芝ノ田町、芝公園、飯倉、吾妻橋向島

廿一日。月島、三吉橋、千駄谷、青山五丁目

廿六日。杉並和泉町、下北沢上原、成城学園

廿八日。中野、逓信博物館、芝公園プール蚕糸会館

三十日。成増、板橋五丁目、日石本社、大森新井宿

八月二日。九段、麻布霞町、東鳥居坂、上馬

四日。中野、等々力、西巣鴨

十一日。東鳥居坂、芝公園プール、北沢二丁目

十三日。中央郵便局、芝公園プール、白金三光町、天沼三丁目

十六日。上板橋三丁目、雑司谷一丁目、放送局、関東配電

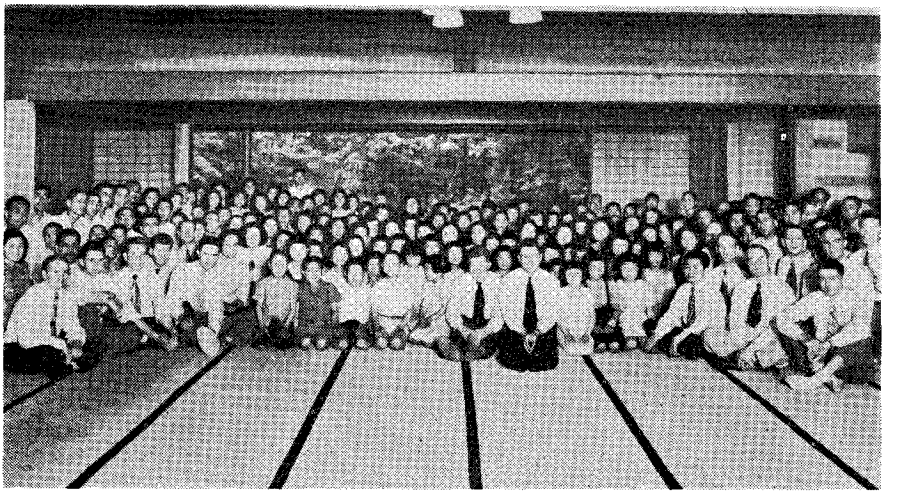
十八日。大宮前、天沼

こうして日記を調べていると、まだ戦災の跡まざまざとしていた東京の、その一軒一軒で会見した人々の生活の状況や言葉の端々が十三年後の今日になっても昨日のように思い出される。その後九月廿二日に訪問した目黒三谷町の遠藤さんは立派な応接間に亡父の肖像額が掲げられてあったが、その亡父というのが、私の学生時代の友人であったことを発見して感慨を深めた場面があったり、十月一日に訪問した古川橋では白石源吉兄弟と会って福音の談義に時のうつるのを忘れたこともあった。

五

宣教師たちが着々と伝道の仕事を進めていた。私の日記（一九四八）の中にも其の片鱗が随所に見られる。その幾つかを摘記すると

（八月二十六日）伝道事業は地方へも延びて行って現在の名古屋支部の発端はその時始められていた。この日私はかねてアンドラス長老（現伝道部長）と約束してあったので午前八時半に名古屋駅前の芝生で待っていた。其処へ軍政長官夫人の運転する自動車でアンドラス長老とプライス長老が来着した。鳴海町で近く伝道を開始するので



天王、市島家の千畳敷の部屋で開かれた
北地方部大会（新潟、群馬、仙台）

地形や状勢を見ようというのである。今日のように立派な国道が出来ていない時で、沿道はすばらしい岡や畑で静けさを柔かく包んだ雰囲気に満ちていた。鳴海町ではまず佐藤竜猪兄弟のお宅を訪問した、佐藤兄弟は自宅を解放して二、三十人の少年少女たちのための日曜学校を開いていた。子供たちは嬉しそうに佐藤兄弟から英語の讃美歌を教わり、得々として合唱している姿がまぶしいほど可愛らしく見えた。

（十月一日）まだ固定した支部が出来ていないので随所で集会を開いていた。この日は午後六時半に田園調布駅でアンドラス長老、テッドプライス長老、白石兄弟たちと落合い調布高女の教室でキリスト教研究会を催した、それで参集する求道者五十人ばかりを数えた。

（十月三日）荻窪の教会でクリソールド伝道部長から、新らしく来任した若い宣教師たちに日本語を教授することを依頼され、今週から水、金の両日、週二回午前九時に本部において一時間づつ日本語の勉強を始めることにした。

（十月三十一日）午前十時から田園調布第二小学校で日曜学校を開く、プログラムは次の通りであった。

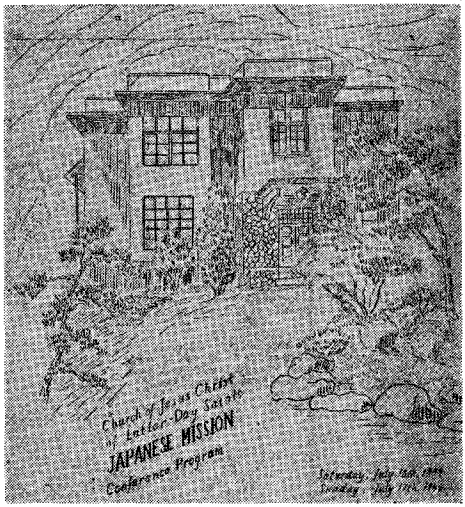
1. 司会者アンドラス。2. 開会の歌三番。3. 同祈り高木兄弟。4. お話、クリソールド部長、高木兄弟。5. 歌の練習三番及び二十五番、7. 分級（英語クラス吉井長老、大人クラス高木兄弟、十四才から十七才クラス赤木長老、八才から十三クラス吉井長老、八才以下城田姉妹）8. 閉会の歌二十五番、9. 同祈り吉井長老（出席者八十名）

一九四八年は伝道部再開初年度であるから教会は極めて多事であった。五反田、高輪、荻窪、雪ケ谷、田園調布と各所で集会を催すことに大童であった。伝道部長が在京の古い会員を本部に招待して懐古談に花を咲かせたのは確か五月の半ばであったろうか。

六

明けて一九四九年である。初夏の頃から新潟県の旧家市島家から教会に対して所有土地

邸宅を寄附するとの議が起ったというので、其の実施検分のため伝道部長と奈良兄弟と三名で六月八日午後九時四〇分発上野発列車で新発田へ向った。途中高崎から佐藤森三郎兄弟も加わり、翌九日朝天王新田に市島家を訪ねた。クリソールド伝道部長は既に検証ずみの処であったが、其家は鄙には稀に見る堂々たる邸宅で天然ガスがふんだんに噴出利用されていた。邸宅も宏大であり何町歩かの田圃も附いているし、周囲三哩もある湖沼もあった。若し教会が寄附を受けることになれば、邸宅は校舎に、湖沼はモルモン移民式の干拓工事を行い、田畠は農業実習用にというわけで農業大学創設の候補地としては好適の処だと判断された。其の後十二使徒のカウリー長老が実地検分したほどであったが結局不調に終ってこの問題は消え去って了った。



故カウリー長老（十二使徒）管理のもとに開かれた献堂式及び大会のプログラム

閑話休題、七月十七日（日）十二使徒会員カウリー長老の来朝を期して広尾の順心女学院の講堂で第一回の会員大会を開いた。札幌の熊谷姉妹、大阪の桂兄弟、名古屋の佐藤（竜）兄弟、高崎の佐藤（森）兄弟たちも遠路遙るばる参集して午後一時から四時まで予定のプログラムを進めさらに五時から本部において伝道本部の献堂式がカウリー長老管理の下に執行された。七時からは国会議事堂前のチャペル・センターにおける進駐軍側の大会へ出席した。

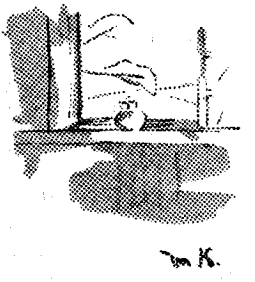
日曜学校は荻窪と雪ケ谷と青山一丁目のレディス洋裁学校とで開いていたが、私は青山へ出席した。宣教師たちの熱心な伝道事業は此頃軌道に乗り出して次から次とバプテスマをうけて教会員となる人の数が多くなった。柳田聡子姉妹が名古屋から上京してテッド・プライス長老からバプテスマを受けクリソールド伝道部長から按手礼をうけたのも八月十八日であった。私の肉親が同じ信仰の丘を越え、平凡な安悦に満ちた狭い道に入って来たことを喜び感謝し、み恵みの限りなく世の人々に及ぼすという事実を眼のあたり見て、これほど歓喜を覚えたことはなかった。此の日柳田姉妹と同時にバプテスマを受けて兄弟姉妹となったものが十二名もあった。

その頃伝道部長更迭の噂がしきりと伝わり心細い気がした。しかし教会は個人の教会でなく神の教会であり、宣教師が変っても教義に何の変りがあるはずなく、真理はどこまでも唯一つであると承知していながら、やはり気にかかる話ではあった。然るに間もなく新伝道部長が赴任して来た。それがやっぱり私たちにとっては忘れ得ない人の一人となったところのヴァイナル・ジー・マース長老であったのである。

—未完—

新春座談会

仙台支部



うららかな元日、聖さん会のあと仙台支部では座談会を行ないました。しばらくぶりで帰郷した会員や、きれいに着飾つた姉妹たちをまじえ二十数人が、あれこれ話し合いましたが、その中から二・三の問題に焦点を合わせてみましよう。

〝すべてよし〟について

福田濃（支部長）　さっき阿部兄弟があかしの中で、モルモンの生活態度は「すべてよし」とするものだといったが、それはどういう意味ですか。

阿部順夫（教諭）　自分に襲いかかってくるいろんなものを、楽天的なみかたでとらえたいということです。賛美歌には〝いとよし〟とあるが、その意味は、苦しみも悲しみ喜びも、よしとして身に受けるということだと思う。善とか悪とかいうことについての価値判断もしないで、そのまま受けるということでなくて、積極的な意味で、すべてのものを自分にとっていいものにする。自分の前に立ち現われたものについては、自分の栄養にしていくという意味で使ったのですが。—

福田　悪い結果を招いたものも、わざわいを転じて福となす、ということで〝いとよし〟ということですか。

阿部　ぼくの考え方からすればそうだ。なぜこういうことを考えたかというと、生徒とのふれ合いの中で、教師のあり方が非常に生徒に影響を与える。生徒にいくら暗い気持ちを持つなと教えてもダメで、自分自身が楽天的というか、明るい健康な精神をもって生きなければ、生徒たちを明るくすることができないんじゃないかと思った。ぼくの「すべてよし」という受け取り方は、そういうところからもきていると思う。

塩干鶴子（主婦）　「すべてよし」として感謝の気持ちですべてを包んでしまうことね。悪いようにみえても、将来よくなることの前提かもしれないのだし……。

上野武志（商業）　しかしモルモン経典を読むと、悪いものは悪魔から出る。いいものは神から出ると書いてある。悪魔から出たものを感謝するということはない。（笑い）

福田　パウロもすべてはよいものじゃないといっているが、ぼくは妥協じゃないが、すべてを感謝するということはいいことだと思う。

紙谷愛子（無職）　わたしは、すべてを感謝して受け取るということは立派なものだと思うけれども、自分に起こったことをすべてをよしとして受け入れるということでなくて、自分の中でいいものとして育てることが

大切だと思う。安易にすべてをありがたいというのでは、わたしはとても抵抗を感ずるわ。

中野百合子（無職）　すべてをよいものとするためには、積極的な意欲と努力が伴わないとできない。受け身の形でありがたがることは無批判であり、わたしも賛成できない。これは生きていくうえに大切なことだと思う。

紙谷　祝福を感謝しますというからには、自分の生き方のうえで、それを本当に神の恵みとするために、大きな努力が必要なわけですね。

東海林絹江（学生）　すべてを受け身の形で受け入れるということは無批判だというけれど、そうすれば、神にすべてをおまかせするということと矛盾するような気もする。

紙谷　きっぱりした生き方――つねに自分の努力と、生きようとする目的がなければ、神にすべてをおまかせすることはできないと思う。

阿部　〝すべてをよしとする〟ということだけを取りあげていえば、いろんなことがいわれるかもしれないが、開拓者たちはあの苦しいさなかにあの歌を歌ったので、そういうことから考えれば、彼らの生き方は積極的だ。

東海林　無批判であるというのは、怠情な部類にはいりますか。

中野　批判ということばを広く展開した場合ははいるでしょう。

紙谷　中野姉妹の批判を東海林姉妹の批判ということばとは、ちがうんじゃない？本当の批判というものは、新しいものを生み出すものだし、アラをさがすという意味の批判とはちがう。

中野　物事に対してこうあるべきだというひとつのはっきりした指標があって、自身が身をていしていくだけの積極的な意欲と努力が伴って、批判が批判として生きてくる。もちろんその根底には愛情がなければ生きてこない。そういうところからわたしはことばを使っているから、ズレたのね。

東海林　自分から働きかけて、正しい批判というものが生まれるわけですか。

中野　そうですね。

モルモンの男性と家庭

塩（千）　夫が神権者の場合、それを助けるのは妻のつとめです。夫が教会に奉仕し、勉強し、祈っているのをみるとき、妻や子もなにかやろうというファイトがわいてくると思う。たとえそれが苦しい生活であっても、最後には恵まれると思うの。

紙谷　神権者に家族のひとりでも不満をもったり、ついていけない場合。双方に信仰のあり方の問題も出てくる。モルモンであれば社会的にも繁栄するはずだし……。

仙台支部長
福田　濃

塩（千）　それはそうだが、苦しいのはいまその過程を歩いているからで、やはり最後には高くあげられると思う。

阿部　四・五年前だが、大学へ行っていたとき、熱心な女のクリスチャンがいた。その人は「男の人は妻とこどもをうまく養って、立派に育てていける力を、クリスチャンとして最初に持つべきだ。それが男の基本的なつとめじゃないか」といった。当時ぼくはそういうことを考えなかったが、いまいわれたらギクリとする。女の人はそういうことを男に望んでいるんじゃないかな。（笑）

福田　しかし妻とこどもを養っていけるだけの最低生活というのは人さまざまで、はたからみただけでとやかくいえない。

塩（千）　同じ最低生活でも考えと、また価値あるものの割り合いがちがうから。

中野　マッケイ大管長は「家庭生活は社会のひとつの単位として、あらゆる活動の一番もとになるものであるから、男の人は妻子を幸福にすることができなければ、モルモンの男性たる資格がない」といっています。

福田　これはどうも頭が痛い。（笑い）

阿部　どういうのが幸福か、その問題は人によってちがう。ぼくがいったのは物質的な面だ。

中野　父として夫として、精神的にも価値あるものを与えなければいけないし、責任を果たさければいけない。

阿部　岡という貧乏な数学者が文化勲章をもらったが、学者の中には本ばかり買って、家庭用品はおろか座ぶとん持たない人もある。余裕があるとかないとかということじゃないんだな。スキーの好きな人はなにをおいてもまずスキーに出かける。それもいいが、家庭をかえりみないことはいけないと思う。

紙谷　岡さんがすばらしい花を咲かせたかげには、奥さんの内助の功があると思うが、あたしは女として生まれた以上は、夫を助けることのほかにも、女として生きる道があると思う。家庭の中にあっても女の人間性をとうとび、それを生かしてやるだけのものを、男の人は持たなければいけないと思うわ。

犠牲について

中田力（学生）　自分を犠牲にするというのと、個人主義でいって自分をつくってから他人におよぼすというのと、自分を愛するように他人を愛するという。この三つを考えた場合、結局どれをとったらいいか。

福田　ぼくも東京にいたころ、そういうことを考えてノイローゼになった。そのころは結論をえないまま何年間か空白で過ぎてしまったが、いまは一応の結論は持っている。

阿部　その意味を考えるには前提が必要だ。たとえば物質ということばで話し合っても、若い人と年配の人とはちがう。教会にはいってきて何年かは精神一辺倒に傾く。それに対して反省が出てくる。ひっくり返って物質的なものへもどる。もどってきてそのうえで、なお精神的ということにたどりつく。年配の人の考えている物質的というものは、積み重ねを経た考えだから、若い人たちとズレがある。ところでいまの個人主義うんぬんということだが、ぼくはズルイいい方だが、個人主義では人間はきたえられない。犠牲だけで人間は生きていけないと思う。

中田　しかし自分を犠牲にするということを教えていると思うのですが―。

阿部　三つとも教えている。

天野昭（学生）　区切れば自分を愛することが第一で、隣を愛するのは第二の段階だ。

紙谷　自分を愛するという愛し方が問題でしょう。

天野　愛するということは自分の生活をみればわかる。自分を愛さない人がいるかどうか。

中田　神の生活に近づくことが目的ならば犠牲精神をみていけばいいと思うのですが。

中野　こういうことを考えてみたらどう？自己に対するはっきりした把握（はあく）とその中に盛られている内容を確信がなければ、ひとにあげることはできない。犠牲することはできない。それがあって与えてやれるのであって、与えたものがあとで何倍かになってもどってくる。そういうことのくり返しにおいて自己完成があるのではないかと思

う。

福田　正しい意味で、自分を愛することができない人は他人を愛することはできないのだから、中野姉妹のいわれたことは非常に大切だと思う。

阿部　犠牲はただ自分を捨てることではない。自分を愛さない人は、自分を捨てるのですから虚無的になる。虚無であれば人生がむなしくみえる。そういう人が実際に世の中のために、他人のためにすることはできないと思う。人間は自分自身を正しく愛することすらできないんじゃないか。

東海林　わたしは家族の中でだれかひとりが殺されるとすれば、すすんで自分の身を代わりにさし出すと思うのです。家族がひどい目に合わされたならば、たえられないと思う。

福田　親のために自分を犠牲にしたからということだけで、すべてが解決できたとは思えない。あなたの考えている自分を犠牲にしようと思っていたことを、両親は逆のことを考えている場合もないことはないと思うのですよ。

中野　親の立場、子の立場のちがいもある、聖書には「人その友のために己の生命をすてる。これより大なる愛はなし」とあるが、愛のもっとも端的で純粋な現われ方としては、東海林姉妹のいわれることは、原則として正しいと思う。しかしそこに知恵を働かせて、周囲との調和も考えなければならない。

阿部　若い人は十分悩み、考えたほうがいい。「いかだが流れてきた。ひとりしか乗れない。自分は乗るべきか。それとも友を助けて自分は死ぬべきか」ということも、考えるとむずかしいことだ。　（文責　遠藤　肇）

一言抄

神を愛する心を、兄弟姉妹を愛する心を、そしてイエスキリストの福音を愛する心を培おうではないか。

（ヒーバー・J・グラント）

◇　◇　◇

我が家を秩序の家としよう。互に愛し合おう。我々が互に愛し合い、神の子達の間に好意の気が満ち溢れたならば、天の父も亦我々に祝福を与えずには置き給わぬであろう。

（ジョージ・A・スミス）

◇　◇　◇

われわれは罪を犯したならばそれを悔改めて能う限りの償いをせぬばならぬ。しかしわれわれの犯した罪がわれわれの力によっては償い得ない場合、我々は神の恩恵と慈悲とにおすがりしてその不義を潔めて頂かねばならない。

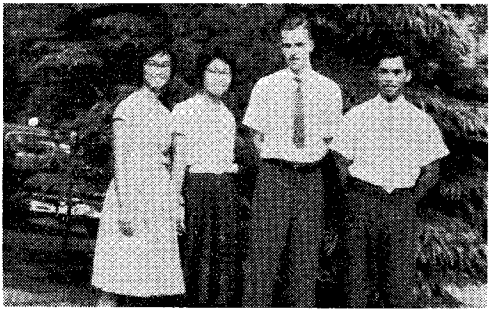
人は自らの罪を許すことが出来ないしまたその罪の結果から自らを潔め去ることも出来ない。人に出来ることは、罪を犯すのを止め、将来において善を為し、かくて役の行為が主の嘉みし受入れ給うところとなるよう努めることである。

ジョセフ・F・スミス

東京北支部のホープ

よきハイティーン群と私

(聖徒の道編集部員)　神崎良太郎



昨年の十二月二十七日、支部のハイティン連中が十一名集まった。日曜学校で彼らと共に学ぶ私が皆にわざわざ集まって戴いたのである。

私たちは教会堂がないため、特別の努力を払わなければ日曜学校やM・I・A等の定例集会以外に顔をあわすことは出来ないそういう状態の支部にあって、私は日曜学校だけでは教師としての義務や責任を十分果すことは出来ないだろうとよく自覚していた。また定例集会では予定のプログラムがギッシリとつまっているためにお互のより一層の親密な感情が交流することは少ない(もっとも彼らは比較的仲が良いのであるが)それでその意味からも特別の会をもうけることが必要だと感じていた。集まってくださった中で皮肉かどうか私の弟だけが求道者で後は全て兄弟姉妹たちであった。

適当にムシャムシャ喰べてよく気分が柔いでから讃美歌とか祈りによって会を始めた。彼らはこの会の約一週間前に、ある孤児院をM・I・Aのエンサイン&ローレルのクラス活動一つとして訪問していた。それでまずその報告と反省をし、今度からどのような点をもっと考慮していくべきかを検当した。次にこれからどのようなことに関して話合うか私も含めて議題を出し合った。大きなものとして、

一、これからの一年のエンサイン&ローレルのクラスとしての計画。

一、神を信ずる。神を知っていると言うが、私たちは信仰の対象である天の御父についてどの程度知っているか「あなた

の言う『神』とは？」と説明を求められて果してすぐ適切に答えうるか？

一、私たちの教会では、この教会を唯一、真の神の教会だと言明しているがなぜ唯一且つ真の教会と言えるのか？

一、私たちはバプテスマをどのような状態の下に受け、現在どの様な気持で教会に通っているのか。

が出題された。しかし時間の都合で全部を話合うことは出来ないので最後のを皆の希望によって選んだ。これを出題した兄弟の説明はこうであった「宣教師からレッスンを受けたが宣教師の勧めのままにズルズルと何もよくわからぬままにバプテスマを受けてしまった。しかし今になってバプテスマを受けるのが早すぎたのではないかと苦しんでいる。聖書を読み考えている中に疑問だらけになる。教会に出席するのもつらい。それで私は皆さんがどのような状態でバプテスマを受けたのかどの程度の確信持っていたのか。そしてそのバプテスマを経て現在どんな気持で教会に通っているのか教えていただきたい。」と。それで出来るだけ彼の問の答となるように述べ、終れば「終り」をいって次の人にバトン・タッチをし全ての人が言い終るまで口をはさまないと約束しあった。一人一人が順番に述べていった。言いたいだけ言って貰い私は黙ってメモをしながら聞いた。

懐疑的な人に私たちの信仰、確信を正面切って問われる時、普通の人なら変な気持になることがある。私たちが信仰を最終的に得るのは理論や論理によってではないだけに自分の確信や信仰を相手に納得するように説明することは難しい。その場の空気は一人一人述べていく中に提案者の気持に同調し始めた。自分たちは別に何の根拠もなくただなんとなく、よくわからぬままバプテスマを受けたのではないかと疑い始めた。中には早すぎたかなと思ったり、はっきりと確信もせず受けて会員となったのではないかと責めを感じた人もいた。まだバプテスマを受けぬ弟の言葉は一層傾きかけた空気を強めたようだった。弟は言う「教会の教えもまたそこに集る人も大変良いと知っているがどうしても、なぜこの教会だけが唯一、真だと言えるのか確信出来ない。確信出来ぬのにバプテスマを受けるのは神に対する侮辱のように思えるし怖い」と。しかしながら我が愛するハイティン群はこのようにも言った。「私はバプテスマや按手礼を受けることによって聖霊の賜を得ることが出来、もっと良く理解も出来ると教えられたのでそれを信じてバプテスマを受けた」と素直な信仰ではないか。また「私は教義に関してよく知らなかったし絶対の証詞を持ってバプテスマを受けた訳でもなかった。しかし私が受けた教えはすばらしいと思ったし自分によく親切にしてくれて感謝し教会の人たちを素晴らしいと思った。そしてバプテスマを受けた。今このように教会に来ていることをとても喜んでいるし感謝している」と言った。多くの出席者がこの言葉に私もそうですといって同意を示した。彼らは率直にドンドン述べたがそれに関してまとめて見ると「充分に確信して受けた訳ではないのであらためて聞かれるとバプテスマを早く受け過ぎたかなと思うがしかし今バプテスマを受けて教会に通っているのを喜んでいる」ということだった。

それから彼らはバプテスマを受ける前にもっと良く確信した方が良いということに関連して、宣教師に対する不満をのべた。

宣教師はただ十回のおきまりのレッスンを機械的にバタバタと忙しくやって、すぐバプ

テスマを受けるようにと言う。質問にも納得するように説明してくれない。だから会員になってもすぐ教会に来なくなる人が出てくるのではないか。それもその一つの原因ではないかと。また宣教師に本当の愛情があるのなら、もっと時間をかけて、求道者が良く確信してからバプテスマを受けるようにさせるべきではないかと言った。また宣教師はただバプテスマを受けるようにさせるだけのように思うと言うのである。しかし愛情云々に関する限り彼らは、それは我儘だと知っていた。

最後に私に意見を求めた。私は大体次のように答えた。「問題をバプテスマと宣教師に関して二つに分けてみよう。皆は何もよくわからずまた確信もなく教会に入ったのだろうか。少なくとも十回にわたって最も根本的な教義を教えてもらい、その中で何故七百以上のキリスト教会の分派があるのにその上この教会がたてられたのかをジョセフ・スミスの話を通して知った筈だ。またバプテスマを受けるまでに幾度か集会に集りそこでも教義を学んだだろうし、会員の人からも何かと聞きかじり、その上自分でも少しは聖書やモルモン経等を読んでいる筈。それで何もよくわからないとは言えないでしょう。それにいくら教義を知っていたとしてもこの教会に対する真実性を少しも確信しないでバプテスマを受けれるだろうか。信仰の状態には怖れやためらいをやっとのことで逃れた初期的なものから、あらゆる疑いや詭弁にも動ぜぬ確固不動の力強いものまであるが私たちは程度の差こそあれ確信し信仰を持ってバプテスマを受けている。私たちはバプテスマを受ける前にも教義を良く知っている方が望ましい。しかしいくら知識を重ねたとしても、知識だけに頼る時、最後には失敗するに違いない。なぜなら神の存在性やモルモン経の真実さ等は終局には直接神によって聖霊を通じて個人個人の胸の奥深くに知らされる以外に真実に確信することは出来ないからだ。私たちがバプテスマを受けたと言うことは本当に感謝しても早すぎたと悔むことはない。人によっては自分が、心を頑なにせず、謙(へりくだ)って求めたからこそ神の恵みによって信仰を得たのだということを意識しないかも知れない。だが実際は先程も言ったように程度の差こそあれ、人が謙虚に真心から求める時に神より与えられた確信を得て各々バプテスマを受けるのだと私は確信している。

だから私たちはバプテスマを受けた時の自分の信仰状態が非常に弱かったからと言って早すぎたとかないとか悩むことはない。とにかくその時を出発点として自分の信仰を出来るだけ立派に育てるようにすべきだ。

それから宣教師のこと、まず私たちは宣教師に多くのことを要求しているけど彼らの役目は何だろう。はっきり言って彼らは人を教会に導き、信仰を得るように援助しその人にバプテスマ与えて会員にすること、それだけが彼らの仕事で、あなた方が要求したことは実は私たち会員の役目なのだ。それから宣教師は質問を受けた時たくさんに答えてあげたくても、レッスンの進路によって当然一定の範囲以上答られない。混乱するばかりかも知れないからだ。また末日が迫っているために出来るだけ多くの人にこの真の福音を伝えねばならない。だから余り一人の人に詳しく長くかかっておれない。しかし宣教師が詳しく教えないからと言ってそれは彼らがいい加減の態度を取っている訳ではない。もちろん私たちの信仰をよりよくするために教義をよく学ぶことは是非必要だ。が信仰そのもの

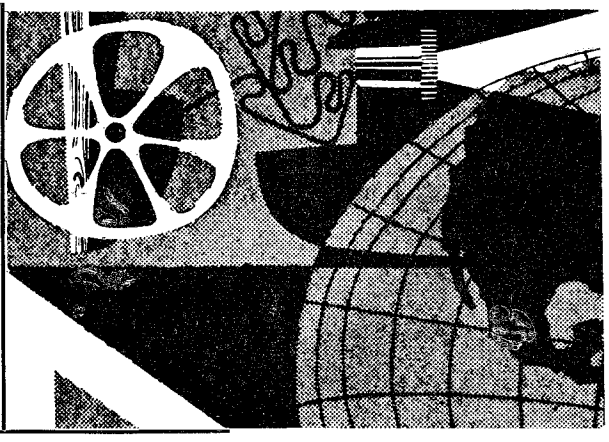
は難しいものではない単純なものだ教義を詳しく知らねば得ることが出来ぬと言うものではない。しかしより詳しく知りたい人には、詳しく学ぶ機会がよく与えてある。私たちは不足の所は補ってあげるよう常に求道者の方に接すべきだ」と。

彼らはそれでは出来るだけ確信を強く持つように求道者の方に接しようではないかと言った。

そしてこの教会の会員同志は親しく家族的に呼びあって良いが求道者にしてみるとかえって中に入りにくく淋しささえ覚える。だから求道者の前で余りニックネームなどで呼ばぬようにし、彼らの横にすわって話しかけ、少しでも早くなじんで貰おうと決議した。ハイティンの人たちは自分たちが入る時少しアヤフヤだったために後になって苦しむことがあった。それならこれから入る人にはそんなことが出来るだけないように助けようではないかと言うのである。私は彼らが最後には満足し証詞をいくばくか強められて帰ったと感じた。

それにしても、このハイティン

（七六頁につづく）



〈青年への解答〉

科学と宗教は争うか

ジョン・A・ウイツソウ長老

「科学と宗教は争うか」と言う、昔からあるがいつも時々くり返される質問に対する答は「否、そのような争はない」と申上げたい。初期の時代にあったいわゆる争はなくなりつつあるか、もしくは消滅してしまっている。争がのこっているのは個人の意見の間にだけである。科学と宗教の目ざしているのは共に「真理」であるから、これはそうでなくてはならない。たとえば、大管長ブリガム・ヤングは「福音は真理の泉である。而して真理とはわれわれが求めているものである」と声明した。これは科学もしくは宗教を、聡明にまた忠実に奉ずるあらゆる人々のもつ見解である。科学の中には、宗教にあると同じく、この先永年の間に「真理」だけ残って勝を論すると言う確信がある。また、ブリガム・ヤング大管長の言を見ると「誤謬の消滅する時、真理が留る」と言ってある。科学もしくは宗教に見られる熱心な探求は「真理」を得るためであり、またもっと多くの「真理」を得るためでなくてはならない。人間が大切にしていた考えや、永年心に抱いていた信念も「真理」が主な争点となるならば、「真理」の前にしばしば崩れてしまう。もしも「真理」を第一に置かないならば、世には健全な科学

も尊ぶべき宗教もない。このことは、人のよく知る歴史的の出来事が証明している。過去に於ける有名な思想家アリストートルは、一つは軽く一つは重い二つの石を高い所から落すと言うと、重い方の石が先に地面につくであろうと教えた。このことは、何千年間学者たちによって認められていた。アリストートルの権威は疑うことができないと、学者たちは思ったのである。

しかしながら、ガリレオと言う一青年はこれを試してみようときめた。イタリーにあるピサの斜塔の上からガリレオはいろいろ重さのちがった石をいくつも落した。ところが、これらの石は重さがちがっていても同時に地面を打った。間違った考えの学者たちはびっくりして息が止った。

この試験もしくは実験によって、間違った学説が正しい学説におきかえられたのみならず、「真理」に達する一方法の新しい見通しもまた得られたのである。この有名な実験は、近世科学のあけぼのの中にある歴史的のものである。

「真理」を発見してこれを試験する実験的方法は、これを科学と宗教の分野に応用することができる。科学も宗教も共に「真理」を得ようとして努めているから、この二つの間に争のあるはずがない。「真理」は不変である、これはレッキとした科学であろうと宗教であろうと同じである。「真理」の一部しか知ってない場合、もしくは人が議論をするに当って、確実な事実のかわりに支持を受けてない諸々の考えを使う時にだけ衝突が起る。たとえて言えば、科学も宗教も二つながらが正確に知っていない地球の年齢とか、地球上に「人間」が来た時とかについて聡明な人たちが「へりくつ」を言う場合、そこに何かばかばかしさがある。

科学的方法によれば、地球は非常に古いものであると思える。また聖書の中にある或る聖句を見ると比較的新しく創造されたようでもある。しかし、どちらの主張も議論の余地がないほど確定はしていない。従って、現在われわれはいよいよ多くの智識を集めて、忍耐強く決定的な結論の出るのを待っている。科学と宗教が認めているやや違った方面の「真理」も意見の争を導くものである。科学が近世に生れたのはほぼ四百年前のことであるから、科学はもともと外部的性質のものを考えてきた。科学が天秤で測れない、もしくは其ほか普通使われている器械で測れないものに興味をもつようになったのは、つい最近のことである。それに反して、宗教は「真理」の面に於てはあらゆるものを内容としているけれども、心と霊の事柄にまず注意を向けるのである。科学は自然界の事実を集め、宗教はこれらのものを「神の律法」に従って利用する。こう言う風に科学と宗教とが努力している面が違うところから、理解の足らない人々は、これら二つの方面における人間活動の間に争があると言うことがしばしばある。

各分野にある人々の間に見られる意見の相違は、普通お互いが「真理」を基本的な原理として認めるのをいやがるのによる。例を以て説明すれば、極端な科学者は直接肉眼で見えないものは何でもみな叩き出すであろう。眼に見えない世界は地球上の人間に閉ざされていると、かれは主張する。宗教界の人は、この眼に見えない世界もまた人間が知ることができると主張をする。「神」の存在は、普通科学で用いている力よりも別の力を利用して絶対確実に証明される、と。

このような違いが起ると、意見の衝突もしくは争がまた起るが、それは本当に科学と宗

教の争ではなくて人間同志の争である。まだ迷っているのは宗教家であることもある。最近、宗教界の指導者で、地球は円くない平べたいものであると宣言した人がある。当然、ある航海者やそのほかの人たちが立ち起って抗議をした。人間同志の間に争があったが、しかし正しく証明された科学と宗教との間には何らの争もなかったのである。

年月が進むに従い、科学と宗教とがお互いの分野に入りこむ傾向が見えてきている。現に眼に見えない世界をますます科学者が研究しており、また宗教家が外部の自然界に「神」の存在と力とを証明する事実に「真理」を得ようとして探求するとき現により小さい分野における科学とより大きい分野に於ける宗教との間に調和が成り立っているのである。

◇　◇
◇　◇
◇　◇

ヤンガージェネレーション

もしも私が十代であつたなら

マール・P・ポールソン姉妹

ある美しい、風かおる九月の朝、私はとうとう自分もほんとうに十代になったことがはっきりとわかりました。早く大きくなればよいと思ってたあのじれったい時代は、もう過ぎてしまいました。これが私の待っていたものです。と言うのはその日は私の満十三才の誕生日でした。そして私は十代に足を踏み入れようとしていたのです。私の誕生日の贈物の何とすばらしかったこと。それから新しい生活が始まりました。

私は本当に、その当時これから先の人生を夢見て何をしようかと頭に画いていた時、私の若々しい血潮の中に湧き上ってきた感激を今でも感ずることができます。私はいつでもその感激を持ちたいと思いますが、もしも私がもう一ぺん十代になれたら、私が本当に変えたいと思う二三の点があることを知っていらっしゃるでしょうか。

私は自分の目をもっとよく見開いて、それによって、私をおとし穴や危害から保護するように私の上に置かれた人々は、自分よりもずっと賢い人たちであったことがわかるでありましょう。

第一に、私は「ほかの人たちは夜おそくまで外出してるわ。私だって」と時々不平を言ったりしたかわりに、私のすばらしい両親の教えをもっと敬まうでありましょう。

第二に、私に福音の理想と聖い真理とを教えるために選ばれた私の指導者たちを貴ぶでありましょう。私は「主のみたま」がお招きにならないような教室のそとへ私の心をさまよわせないで、その人たちの言葉にもっとよく注意をするでありましょう。

第三に、私は群集に従う者となるよりは、むしろ群集を指導する人になりたいと思いま

す。また、「私たちの影法師は一度も行ったことのない所に映る」と言う言葉を忘れないで、善いことの摸範になろうとするでありましょう。

第四に、私はお与え下さったたくさんの祝福や賜物に対して天父に熱い感謝を捧げたいと思います。またとくに私のような若い者を導く助けとして、毎年注意深く祈りを以て選ばれる一つの聖句、すなわち私たちのM・I・Aのテーマに対して感謝をするでありましょう。私はこれらの聖い言葉を「たましい」の中にしまい込んで、私をもっと善くするために毎日何かの方法で実行をするでありましょう。

本当に、もしも私が十代であったなら、私は確に私の目を大きく見開くことでありましょう。そうして私は希望と勇気または力が要るときに、それをどこへ行ってどうして見つけるか知ることができるでありましょう。

私は自分の目を大きく見開くことによって、失望、落胆、心痛などの一つ一つに打ち勝、それで絶えず自分が成長をすることがわかるので、これらを越えて光明を見ることができるでありましょう。

青年時代はすばらしい時代であります。もしもよく計画をしたならば、青年時代は喜と本当の幸福とを生じます。もしも正しく生活をするならば、青年時代は若い人々のすばらしい夢を満足させこれを実現するでありましょう。

今の時代の若い人々よ。あなたがたの目をいつも大きく見開いて下さい。あなたがたが人生の大道をたどる時、あなた方の指導者はいつもあなたがたが人生の大道を通って価値のある人々が入る門をくぐり、限りない平和ととこしえの喜を得るように望んでおります。

（七三頁のつゞき）

の人たちは実に心のきれいな人たちだ。素直で正直だ。彼らは何もかくすことなく話合った。自分の心を開くことによってお互に信頼したからだろう。私はこのような素晴しい人たちと共に勉強出来ることを心からうれしく思う。彼らは近い将来私たちの支部をまた日本のモルモンを背負っていく人たちだ。私は彼らに大きく期待している。彼らは純粋なだけに傷つきやすい。温い気持と注意深さを持って彼らを見守って行こうではないか。

――若き世代へ予言者の与えた言葉――

「わが子よ、忘れずに青年の時智恵を得よ。青年の時から神の命令を守ることを習慣とせよ。汝の要する一切の助けを神に祈り、求めよ。何事でもすべて主のために為せ。どこへ行くにも主のために行け。常に主を念頭に置いて心の愛情をとこしえに主へ向けよ。汝のする一切の働きについて主のみこころを伺え。そうすれば主は汝の為になる善い誡めを与えたもう。眠っている間も主が見守りたもうよう夜寝る時には自分の身を主にまかせて寝よ。そして朝起きる時に神に感謝する念を胸に満せ。このようにすれば終りの日に高く挙げられる。」

（アルマ）

私は御霊の導きのあるよう一日に二度、主に心から祈る少年、少女又は、若い青年男女に対して殆んど又は全く心配するところはないと思っている。誘惑が来ても、彼らは与えられた霊感によって、それを克服する力をもっていると私は信じているのである。御霊の導きを得る様主に願い求めることそれ自体は、われわれを守るものとなり、主の御霊の導きを熱心に、且つ正直に求めるなら、われわれは、必ずその御霊を受けるだろうと私は確信している。

（ヒーバー・J・グラント）

末日聖徒イエス・キリスト教会歴史粋（十四）

ジョセフ・フィールディング・スミス著

第二部　時満ちたる神権時代の開始

第九章　ジョセフ・スミス、モルモン経を授かる――神権の回復

（千八百二十七―千八百二十九年）

六、紛失した原稿（つずき）。

予言者は「ウリムとトミム」によって主にお尋ねしたが、マーテンの願いは聞き届けられなかった。しかしながら、マーテンの心は満たされなかったから、彼はもう一度主に伺ってもらいたいとジョセフにしつこく言って頼みこんだ。ジョセフはその通りしたが、そのお答えは前と同じであった。それでもマーテンはジョセフに泣きつき、いつまでもしつこく嘆願するのでジョセフはまた、すなわち三度まで主に伺った。するとこの度は有望なお答えがあった。彼の願いは或る確かな条件を守るということで聞き届けられた。マーテンはその原稿を兄弟プレザーヴド・ハリスと妻と父と母と妻の姉妹コブ夫人らにだけ見せることができるが、その他の人には誰にも見せてはならなかった。マーテンは、きわめて厳粛な誓約をしてこの約束を守ることを誓った。マーテンが帰宅すると彼に圧力が加えられた。彼は自分がした厳粛な誓いを忘れて他の者にその原稿を見ることを許した。その結果計略によって原稿は彼の手から離れて他人の手に渡ってしまった。

主はジョセフが絶えずしつこく願い求めたことを怒りたまい、マーテン・ハリスがかの版からの飜訳の一部を持って立ち去った後、ジョセフから「ウリムとトミム」を取り上げたもうた。マーテン・ハリスがあの原稿を失ったことが解ったとき、予言者は神の罰を蒙った者の苦痛を受けた。彼は少しも安息が得られなかった。また少しも良心の

休まる折がなかった。彼は身も霊も苦痛を受けている状態で主に近づくのをおそれた。この状態はしばらく続いたがついに或る日天使が現われて「ウリムとトミム」を彼に戻した。かくて彼はこれを通して主の啓示を受けることができた（「教義と聖約」第三章参照）。この啓示によって、敗れたのは主の目的ではなくて人間の企らみであることが知らされた。ジョセフはきびしく叱責を受けて、誘惑に負けたことを警しめられた。それにもかかわらず、主はジョセフがきびしい罰を受けて、心の底から悔い改めたので慈悲を垂れたまい、啓示を下したもうた後、「ウリムとトミム」と金版は両つながらジョセフから取り上げられていたが、数日のうちに元の通り彼に戻したもうた。これはジョセフ・スミスの受けた最も痛い教訓であったが、将来ジョセフの肩にかかってくる、一層大きな責任を負うために、ジョセフに備えをさせることが必要であるようであった。

これから数日後に、ジョセフは別の啓示を受けた（「教義と聖約」第十章参照）。この啓示の中で、ジョセフは紛失した記録の部分を飜訳してはならぬと再び命ぜられた。サタンは、前の原稿の中に書いてある所を変えようという考えを悪人共の心の中に入れたから、もしもジョセフ・スミスがその部分を再飜訳するならば、悪人共はジョセフが二度と同じ飜訳をすることができないということを言い立て、ジョセフが飜訳した振りをした言葉をとらえて、ジョセフを陥し入れるにちがいないと、啓示の言葉ははっきりと告げた。

七、紛失した原稿の内容。　あの紛失した原稿の中にはニーファイの版（大版）からモルモンがつくった約め書き、すなわちリーハイがエルサレムを出た時からベンジャミン王の治世に至るまで、もしくはモルモン経の中にあるモルモン言までの飜訳がのっていた。主は、モルモンがニーファイの版（大版）から約め書きをつくった際、ベンジャミン王の治世に至るまでの約め書きと同じ期間の歴史を誌している民の記録がのっているニーファイの小版を、そのまま大版からの約め書きの後につけておけとモルモンに命じたもうた。このようにして、モルモンがのこした記録の中には、大版からの約め書きと小版の記録そのままとの二つの記事が含まれていた。さて、この度大版からの約め書きを飜訳した原稿はなくなったが、それよりもっと良い記事をまだ小版の記録から飜訳をすることができるから、サタンの企らみを破ることができる。このように、モルモンにニーファイの小版を大版からの約め書きにつけておけと命じたもうた際に現われた主の「賢い目的」がジョセフ・スミスに知らされた。

八、オリヴァ・カウドリ来る。　その後マーテン・ハリスは二度と書き役として働くことを許されなかった。暫しの間、予言者は自分を援ける者がなかった。数箇月の間、

彼はハーモニーにある自分の小さな農場で「自分の手で以て」働かねばならなかった。そうでなければ傭われ口を探さねばならなかった。このようにして主の仕事はおくれていた。彼は自分の使命を果さねばならない。彼は助けたまえと主に祈った。すると千八百二十九年四月の六日、若い学校教師オリヴァ・カウドリがジョセフ・スミスの仕事に就いて尋ねるためにハーモニーへやって来た。オリヴァ・カウドリはこれまでマンチェスターにあるスミス一家の家の近くの学校で教鞭をとっていてスミス家に下宿していた。それでスミス一家の人々から彼は予言者の受けた示現、モロナイの訪れ、金版のことなどを聞いて知っていた。オリヴァはこれらの話は本当であるという気がしていたから、じきじき会ってよく調べたいと思っていた。彼はジョセフ・スミスの話が本当であることを確信したので、ハーモニーへ到着した二日後に、予言者があの記録から飜訳する通り書き留める仕事を始めた。四月の半ば過ぎたころ、主はジョセフ・スミスを通してオリヴァに啓示を賜い、その啓示によってオリヴァを主の仕事に召したもうた。その啓示の中でオリヴァ独りだけが知っているいろいろな事が明らかにされた。その時以来、オリヴァはモルモン経が完成するまでずっとジョセフ・スミスの書き役を勤めたのであった。

九、アロン神権の回復。 飜訳をしている間に、ジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリの二人は、罪を赦すためのバプテスマという問題が、金版の記録の中に数回出てくることに気がついた。当時世間ではバプテスマの教義を誤って解していたので、このことは二人を非常に驚ろかせた。二人は光明を受けるために主にお尋ねをすることに一決した。

千八百二十九年五月の十五日、二人は森の中へ退いてこの問題に就いて教えを授けたまえと祈った。こうして二人が祈っている間に、一人の天の使者が光の雲に包まれて天降り、われは新約聖書の中でバプテスマのヨハネと呼ばれるヨハネと同一人であると名乗り、またわれはメルケゼデク神権の鍵を握るペテロ、ヤコブおよびヨハネの指示によって働く者である。この世の事に関わる福音の鍵を握るアロン神権をジョセフとオリヴァに授けるために遣わされた者であると言って、その手を二人の頭に按いて次のように宣言した。

「汝らわれと同じ業に働く僕らよ。救世主の御名によりて、われ汝らにアロンの神権を授く。こは天使の導きと恵み、悔改めの福音、罪を赦すために水に沈むるバプテスマなどの鍵を握る神権にして、まことにレビの子孫が主の御前に再び義しきに適いて捧物を捧ぐる時まで、この世より決して再び取り去らるることなし」と。

この使者はまた、メルケゼデク神権は間もなく二人に授けられるであろう、而してジョセフ・スミスは教会の第一長老、オリヴァ・カウドリは教会の第二長老と呼ばれると言った。

Aaronic Priesthood

アロン神権保持者は家庭訪問によって進歩する

若いアロン神権者たちは福音により多くの進歩する機会を持っている。その内最も大きなものはブランチ・ティーチングに参加することである。

彼はそこで教会の秩序に就て多くを学ぶことが出来る。彼がよくそれを実行するなら、その訪問によって彼は教会の組織に就て学びその集会に於て、彼はその組総の一部が活動しているのを見ることが出来る。

この若い教師は又人間的な友好関係に於て貴重な経験を得るであろう。彼は人々と逢い話すことが出来、又レッスンを提供し、討論を指導すると云う困難な大切なことを学ぶ。この訓練は伝道に召された時に彼にとって如何に有意義なものであったかを、又あらゆる点に於て非常に価値あるものであったことを証明するであろう。

彼は又知己を広めることによって成長することが出来る。彼は訪問した家族と知り合いの仲となり、彼等からいろいろのことを学ぶ特に彼は彼のシーニヤ・カンパニョン（上級同僚）から学ぶ。シーニヤは通常に熟達した教師であり、人の取扱方に馴れて居り、福音に精通している。彼は若い教師の進歩成長にとって重要な地位にあるのである。

これ等若い人々のシニヤ・カンパニョンを務めることは特別なチャレンジである。又重大な責任を伴うものである。善きにつけ悪しきにつけ、シーニヤの行動は若い同僚に対し模範として強い永久に残る印象を与えるのである。こう云うわけでシーニヤ・カンパニョンは常に用意が出来ていなければならない。彼は物事を、いいかげんにしたり、又世の流行に迎合したりすることは出来ない。彼は常にその信頼に答え、又支部長会から受取った課題に従って教えなければならない。彼はそのレッスンを心を砕いて準備し、確信を以て教えるべきである。彼の訪問は適宜な時間に完全になされねばならない。彼はこのことがすべての教師にとって大切であると思い、又特に彼が信頼されている若い教師に対する影響、その性格と家庭訪問の習性に対する強い感化力を慎重に考えるのである。彼はこの機会をとらえて若い同僚によい習性をはぐくみ、立派な態度を育成出来たらその喜びと満足は大きいであろう。彼は同様に若しも彼が失敗して、ジュニヤ・カンパニョンに不精な習性と考えを見出したら非常に残念に思うであろう。彼は又教えている時に学んでいることを、そして彼自身、よりよき支部教師とな

っていることに気づくであろう。

シーニャ及びジュニャ双方の同僚にとってこれは大変によい機会であり、又大きなチャレンジである。両者ともこのプログラムによって進歩し、又教会全体としても発展するのである。このよい機会をとらえる者は賢明であり、出来るだけ多くこの機会を与える支部長は、ほんとに賢明である。

家庭訪問課題

「貴方の霊的な食物」

人は多くの面と様相を持った最も復雑な神の創造物である。彼は同時に肉体的、社交的知的且霊的存在である。全体の各局面がそれ自身の特長を有し、個々別々の要求を持っているのである。それぞれが成長発展する為にその食物を必要としているのである。これは霊的方面に於て特にそうであり、あらゆる面に於て最も大切なのである。

単に我々の肉体的部門に就て見ても、我々がその栄養をおろそかにすれば生長しないのである。だから霊的な面に於ても適切に養育しなければ弱くなり或は死んでしまうのである。人はこの面に於て強くよくならねば全体的に発展しないのである。

我々は如何にして霊的に健康を保つことが出来るであろうか。我々が自身にとらなければならない霊的な食物とは何であろうか。他にもあろうが下記各項目は特筆するに価いすると思われる。

一、祈り　霊的生活の礎石である心からなる有意義な祈りを通じて我々は自身を創造者に調節することが出来る。

二、断食　肉体的な食物を拒むことにより我々は霊的な食物をより多く取入れることが出来る。

三、聖餐　主の記念にパンと水をとることにより我々は主のみたまが常に共に在り、いつも主を憶えることを約束する。

四、黙禱　礼拝的な精神統一を通じて我々は霊的な価値と目標に対する理解を生長させる。

五、勉学　勉学特に聖典を学ぶことにより我々は霊的なことを学ぶ。

六、活動　教会内に於ける活動を通じて我々は霊的なものをその生活に最も大きく取入れている人々と交ることが出来る。

七、よい生活　物事及び人々を向上させることにより我々は霊的な深さと自覚を得る。もし何にても、徳高きこと、好ましきこと、よき聞えあること、あるいは褒むべきことあらば、われらはこれらをたずねもとむるものなり。

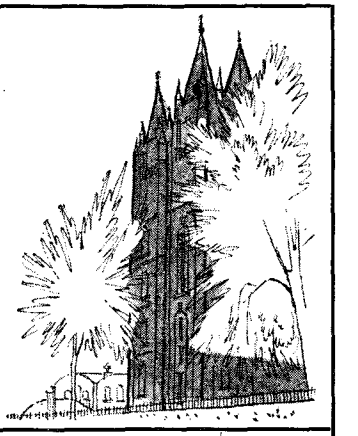
信仰箇条第十三条

八、神の誡命　世俗と世の悪にそまらないことにより我々は主に示された我その踏むべき道をよく見極めることが出来る。

終局的な分析に於て我々各人はその行為の総計に過ぎない。これが真実である以上、我々は我々の霊的なものを飢えさせるのでなく却って養い育てるものを我々の生活の一部とすることが賢命である。若しもこの最も大切な部門が枯死するなら我々が他の面に於ける強健さ、才能又は業績如何にかかわらず、我々は最も大切な点に於て失敗することとなる。

〝われは生命のパンなり、我にきたる者は飢えず、我を信ずる者はいつまでも渇くことなからん〟（ヨハネ伝　六・三五）

（イムプルーブメント・エラー十月号より）



メルケゼデク神権

●●●●●●●行け、汝ら光栄の言を伝える者たち●●●●●●●

この度、伝道部メルケゼデク神権委員会が次のように組織されました。すなわち委員長はポール・C・アンドラス伝道部長、副委員長はハリスン・T・プライス副伝道部長であって、渡辺驩兄弟はこの委員会の一員であります。

千九百六十年十月二十三日、渡辺驩兄弟は北部極東伝道部第一長老定員会々長として按手任命され、続いて堀田秀司兄弟が長老定員会々長会の第一副会長として任命されました。

これから、伝道部メルケゼデク神権委員会と定員会々長会とから、各メルケゼデク神権組織へ出るメッセージと指令とは、毎月この欄に出ることになります。

＊　＊　＊　＊　＊

行け汝ら光栄の使者　走れ、汝ら天の使節
行きて喜ばしき言葉を告げよ
栄に輝く一人の天使、大いなる一人の天使
天より告ぐる言を携えて天かけると。

万国の民に行け　あらゆる国を訪れよ
のこりなく宣べ伝え　すべての真理を語れ
昔ながらの光栄に　福音は照り輝やくと

行け、福音を携えて　喜びの便りを広めよ
ユダヤ人にも異教の徒にも万の民に聞しめよ
鳴り響かせよ、福音の声
天地の果てに至るまで

天の美徳の種子をもち
全地の上にこれを蒔け
エホバ汝を守る、行け
行きて価値ある束を得よ
されば汝は地を嗣ぎて
イエスと共にこの世をば
栄えの中に統治せむ

ジョン・テイラー大管長

誰でもメルケゼデク神権を保有している者は一人のこらず、当教会の偉大な宣教師プログラムに関して特権を持っているが、また厳粛な責任も持っている。

主の代行者として、すなわち人類を救うために主の御名に於て行うために主から委任を受けた者として、私たちの宣教師としての責任は何であろうか。私たちの神権定員会は、私たちの宣教師としての委任を果すことができるように、またそれをはげますように役員を配置され、組織され、手はずが整えられているではないか。

当教会の会員は、老若男女、神権のある者もない者も、一人のこらず福音を宣べ伝え

て、他の人々を当教会に改宗させる努力をする責任があることはよく知られている。「さればその隣人を警しめを受けしことあるすべての人はその隣人を警しむる責任あり」（「教義と聖約」八十八〇八十一）。

新しく改宗する人は、バプテスマの水の中に入ったとき、主から数々の祝福を受けたことに対する口開けとして、まず或る事をする契約上の責任をとる。宣教師の働きに関して、バプテスマの誓約の言葉は次のように規定している。すなわち「神に贖われ第一の復活にあずかる者の数に入って永遠の生命を得るよう、いついかなる時でも、どのような所に居ても、どんなことについても、死に至るまでも神の証し人になりたいと心から思っている」と（モーサや書十八〇九）。

デビド・O・マッケイ大管長は、最近の総大会に於て教会の会員は一人のこらず毎年少くとも一人を改宗させるべきであると提案された。

宣教師として努力をするこのような筋道には、何ら特別な召し、按手任命等を必要としない。教会の会員は自働的に、他の人々に向って回復された福音を告げる責任を負うのである。

教会員が、非教会員であるその友人を自宅に招いて、夕食を共にしたりその他の歓待をした後、福音をその人々に教えることは差支えない。非常に有益な計画は、非教会員の人たちと一しよにモルモン経を読むことである。汽車の中でバスの中で、職場に在って競技場に在って、クラブや社交団体の中で、さては国の内外を問わず「どんな所にいても」、福音の証詞をもっている者はあらゆる正しい機会を利用してジョセフ・スミスと回復の話を語り、救いの計画の根本原則を説明すべきである。

神権者はバプテスマを受けた教会員である故に、この根本的な永続する責任を負って居り、非公式な方法でまた特別な任命なしに宣教師としての働きをするのである。しかしその上に、神権者は実に神権を保有する者であり主の代行者である故に、教会の公けな、組織された宣教師の働きが関係している所にも特別な責任を負っている。

神権は、人類を救うためにすべてのことを行うため、地球上に住む人間に委託された神の能力であり神の権能である。非教会員に関して、これらの非教会員を救いに導くために起らねばならない最初の事は、これら非教会員に福音を説くことである。そして、教会の組織された宣教師の働きは神権者の組織によって支えられている。教会の諸役員が各自の任命された分野に於て営む各種の責任について語り、ジョセフ・スミスは「結局のところ、最大にして最も重要なる義務は福音を宣べ伝えることである」と言った（「わが教会の歴史」第二巻四七八頁参照）。

現在、この組織された宣教師の働きは主として各ステーキ部の伝道部と外国伝道部とを通じて続けられている。外国伝道部の内にある各地方部にも、ステーキ部で行われていると同様の宣教師計画がある。

さて、神権定員会はこの偉大な宣教師計画のどこと旨く会うであろうか。その計画の効果的にして立派な遂行を促進するために、神権定員会は何を為すべきか。長老、七十人、大祭司の定員会は一つのこらず、少くとも次にあげることを全部含む肯定的なよく組織された計画を持つべきである。

一、ステーキ部の伝道部および外国伝道部に於て効果的の働きをするよう定員会の会員に訓練を施す。

定員会の規則的な計画の一部分は福音の勉強である。定員会の会員は一人のこらず、規

則的に行われる神権者クラスに出席すべきである。週日の夜に定期的に繰返す学校を、長老たちとその妻たちのために開くべきである。各定員会は、その定員会の会員たちにモルモン経その他の標準聖典を読ませる諸計画を企てるべきである。また不活潑な会員を再び活潑化する教会のプログラムの一翼として不活潑会員の家で家庭集会を開くべきである。これらの諸集会を開くときは、その副産物として、その集会を司会する会員たちは宣教師の働きをするに当っての経験を得るにちがいない。

二、主の葡萄園で働く仕事を供給する。

長老、七十人、大祭司として、忠実であり立派な資格があり、且つまた事情の許す人々は、国の内外に於て宣教師として奉仕をすべきである。宣教師の働きが必要であるところでは、七十人定員会の会長会の会員の中から四人だけをステーキ部の伝道部もしくは外国伝道部へいつも召すことができる。永続的の指針として、忠実であり立派に資格のある年若い長老たちには、外国伝道部で宣教師として奉仕をする特権を与えることが望ましい。年輩の兄弟たちはと共に召されて、二人して改宗者の獲得に出かけ、また小さな支部に於ける新しい改宗者たちに、教会のプログラムが如何に運営されているかを教える。

三、必要なところに財政的援助を与える。

幸いなことに、大ていの個人もしくはその家族の人々は宣教師の働きをするに必要な負担に堪えることができる。いやしくも可能な場合には、常にそうすべきである。数々の宣教師やその家族の人々は、神の王国を建てるために、彼らの財産をぎせいにする良い機会を与えられるべきである。しかし、援助を必要とする人々もあることはもちろんである。この援助は必要に応じて神権定員会から与えることができる。

長老、七十人、大祭司の各神権定員会はすべて活潑な宣教師基金を持たなければならない。いろいろな計画、寄附、もしくは何によらず適切な方法によって、各定員会は、宣教師の働きのために相当の金額を募ってこれを使うべきである。地域的にこれらの基金を今すぐに使わなくてもよいならば、今切実に必要を感じている外国伝道部でこれを使うために大管長会へ送るべきである。

四、一般に、聖徒たちの間に宣教師精神と自覚とを起す計画を企てる。

個々の家族に、伝道地に在るその家族の者を扶養するための伝道貯金を始めるようにはげましを与える。定員会の会員やその他の人々を勧めて、その息子たちが適当な時に伝道に出るよう、家族の祈りの中でしばしば神に乞い願うようにさせる。宣教師歓送会を援助する。教会の諸集会で、折々宣教師という問題について話をする。すべての教会員、とくにまだ宣教師の年ごろに達しない会員の心に、一人のこらずの神権者の肩にかかっている宣教師の働きという責任があるという気持ちを教えこむように努める。

五、新しい改宗者が、教会の会員になったときに援けを与える。

これは教会の肝心なプログラムである。新会員たちを歓迎して、いろいろな組織の中でする働きを与えなくてはならない。会員は一人のこらず、新しい会員を心から親しく、いわば肩と肩とを組むようにして迎え、教会とそのいろいろな組織へ滑らかにまた幸福な感じで入らせるのを主張としなくてはならない。

六、伝道をしている者を活潑に援助する。

手紙を度々出すこと。財政を助ける進物をする。改宗者獲得の目的として参考になる人名を知らせる。教会に出席しているステーキ部の宣教師もしくは外国伝道部の宣教師を認めて感謝の意を表わす。いつでも必要な時には使用ができるバプテスマ・フォント（浸礼槽）の設備をつくる。

Genealogy

ムハマッドの系図

（マホメット）

渡部正雄

回教寺院モスク　インドネシヤの留学生アヨデイヤ君とターバンをしているのは印度人

〝即ちアブラハムに子二人あり、一人は婢女より、一人は自主の女より生れたりと録されたり。婢女よりの子は肉によりて生れ自主の女よりの子は約束による。この中に譬あり、二人の女は二つの契約なり、その一つはシナイ山より出でて奴隷たる子を生む、これハガルなり。このハガルはアラビヤに在るシナイ山にして今のエルサレムに当る〟。

ガラテヤ書　四・二二―二五

このハガルの子がイシマエルでこのイシマエルはアラビヤ人の父祖であり、この血統によりAD五七〇年にマホメット教の教祖ムハマッドが生れたのである。従って現在世界に四億数千万を数える信徒たちはアブラハムを教祖ムハマッドの父祖として尊びモーセをも偉大なる予言者とし、ユダヤ人が脊教したのに反し、彼等は正統にその律法と戒律を守っていると主張している。しかしこの律法に就ては更にガラテヤ書三章に次のように記されている。

〝信仰の出来らぬ前は、われら律法の下に守られて後に顕れんとする信仰の時まで閉ぢ籠められたり。斯く信仰によりて我らの義とせられん為に、律法は我らをキリストに導く守役となれり。されど信仰の出来りし後は、彼等もはや守役の下に居らず、汝らは信仰によりキリスト・イエスに在りてみな神の子たり。汝等若しキリストのものならば、アブラハムの裔にして約束にしたがえる世嗣たるなり〟

エホバの約束の祝福がアブラハムの妻サラの子イサク、その子ヤコブ、即ちイスラエルの血統に与えられたことは旧約聖書に明らかに記されてあり、又前掲引用の聖句にも〝自主の女よりの子

は約束による〟とある。又同じくガラテヤ書三章に

〝かの約束はアブラハムとその裔とに与え給ひし者なり、多くの者を指すごとく「裔々に」とは言はず、一人を指すごとく「裔々に」とは言はず、一人を指すごとく「なんじの裔に」と云へり、これ即ちキリストなり。然れば我いはん、神の預じめ定め給ひし契約は、その後四百三十年を歴て起りし律法に廃せらるることなく、その約束も空しくせらるる事なし。もし嗣業を受くること律法に由らば、もはや約束には由らず、然るに神は約束に由りて之をアブラハムに賜ひたり〟

マタイ伝の冒頭にアブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図と出ているが、このキリストと同じアブラハムの婢女より出たるムハマッドとの相互関係がこれで明らかになったと思う。

ともあれ彼等の信仰の熱烈なことは誠に敬服に価いする。私は曾て東横線の電車の中で十二才位のパキスタンの少年たちと語り合ったが彼等は熱心なマホメット教徒で恒例の大祭に代々木の回教寺院（モスク）に出かける処であった。横浜のセント・ジョセフ学校に学んでいる彼等は巧みな英語で語り、私がモルモンだと云うと知っていて盛んに質問挑戦して来た。モーセは死んだか？、若し死んだら今何処に居るのか？、キリストは何故神の子か？、キリストもモーセと同様予言者の一人に過ぎない。而してムハマッドは最大なる最後の予言者であると。こんな小さな少年たちをしてかくも熱心に宗教を論じさせるように育てたモスクに対し私は驚異を感じ、ユダヤ教と同様、金曜の午後が恒例の礼拝時だと聞いて或金曜日に機会を得て参観して見た。この金曜日は独一創造主アッラアの創造日とされている。小田急の代々木上原駅を下りると参拝に行くらしい異国人を前方に見かけたので走り寄って尋ねると、やはりマホメット教徒でインドネシヤの留学生であった。そして親切にモスク迄案内してくれた。礼拝に先だって彼等は別館に入って行った。水で身を潔めるのだそうだ。礼拝堂は世界中何処に在っても、その正面中央が聖地メッカに向けて造られてあり、信徒は皆メッカに向って礼拝するのである。偶像を礼拝しないと言う彼等の面前には何等の対象物もない。頭上にはターバン、又は白帽をかぶり、特別な法衣を身にまとっている者も居る。祭司は現在トルコの国籍を持っているが、ロシヤ革命の時にトルキスタンあたりから亡命して来た商人で、今も東京で何か商売を日常の業務としているそうだ。絶え間なく一時間ばかり祈禱を唱えていたが、時々礼拝者一同がこれに唱和して立ったり坐ったりする。又跪いて祈る時その顔面即ち額と鼻を床にすりつけるのが特長ある光景だ。

今日、小アジヤ、中央アジヤ、印度、アフリカ、中国、東南アジヤ、特にインドネシヤ全般に亘って四億数千万の信徒を擁し世界三大宗教の一つに数えられるマホメット教の教義は如何なるものであろうか。彼等が最大なる予言者と信ずる使徒ムハマッドを通じて人類に啓示された唯一神アッラアの教えイスラーム、平和と調和と好意の教え、心に徹底した平安をもたらす教えである。朝の未明の礼拝から夜の礼拝までの間をきちんとした生活方式で厳粛に、もろもろの戒律を守り、生々として百パーセント有効に毎日を生きる秩序の教えであり、また国境や人種や貧富を超越し、アッラアに対する義務、奉仕を通じ同胞愛、人類愛で繋がり、相互に親身も及ばぬ敬愛さを以て結ばれる社会的な教えである。実際に彼等が集会の時に、その肌色などを超越して、共に両手で握手して親しみの情を表している様は私たち教会内のふんいきによく以

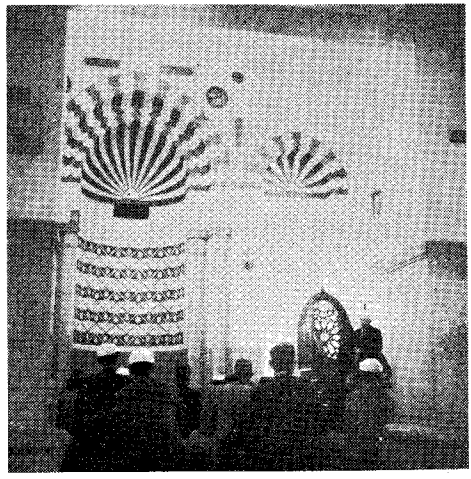
通っていた。

礼拝（未明の礼拝、昼過ぎ、日没前、日没後及び夜の礼拝、この五度の礼拝の外に随意にささげる礼拝あり）、洗礼、断食（ムハマッドが一ケ月間洞窟にこもって断食しアッラアより啓示を受けた九月を断食の月として日出より日没迄断食する）喜捨巡礼（聖地メッカに参拝する）信徒はこの五行を実行し、特に最後の巡礼を終えた者はハッジと云う高い位に就くそうである。

マホメット教はその初期に於ては右手に剣、左手にコーラン（クルアーン、経典）即ち税金を納めるか帰依するかと迫ってアラビヤより起り、怒ちにして世界をせっけんして、かのサラセン、黄金の時代を築いたのだが、その後この強大な信仰を忘れて専ら形式に流れた為に、後進的悲境に陥って、どこにもイスラーム本来の姿を見ることができない状態となったが、最近三十年来イスラーム圏で展開された民族独立運動に続いて、第二次大戦後に於けるイスラーム諸国の独立によって、信仰に対する覚醒が促がされ、往時のような熾烈な信仰の状態に帰らんとする努力が続けられ、イスラーム世界復興の筋金となろうとしているのである。

この時に当り私たちが彼等を正しく理解する為に彼等の教義を一広知っておくことも必要なことであろうと思われる。

尚、イスラームの根本信条は「カリマ」でそれは「ラーイラーハ、イッラッラーフ、ムハッマドル　ラスウルッラアー」即ち「アッラアのほかに神なく、ムハッマドはアッラアのみ使いである」と云うことを唱え、かつ行ずることである。アッラアは仁愛にして慈悲深い主完全無欠で全智全能で総界を照覧し、森羅万象を統裁する主であると信ぜられている。



回教寺院（モスク）の内部、正面の太陽の画が聖地メッカの方向を示す

日曜学校
三月練習の讃美歌

第三十六番　春の木の芽

春の気配を感じる今日この頃それにふさわしいこの歌を練習しましょう。二節目は秋と冬に関してのものですが、又心をあらたにして、これから来る四季を神をたたえつつ過そうではありませんか。音楽的には簡単な歌ですが、折返しの部分は又最初のメロディーに返って来て、下の歌詞をうたって下さい。最後の段の十六節音符の二つ続いているのはすべらない様はっきりうたって下さい。二節で構成されているこの様な讃美歌は間奏はいりません。

初等日曜学校
三月練習の讃美歌

子等は歌ふ四十番　主のよみがえり

この歌は毎年うたうので知っている人も沢山あると思いますが、上り下りの多い歌で、間違えてうたっているのを時々聞きますから、又ここであらためて練習しましょう。音が混み入ってますので、少しずつ区切っておぼえる様にして下さい。

日曜学校ガイド

全国の日曜学校役員教師の皆様、神の栄光のために日々神の御仕事に忠実に励んでおられますことを深く感謝致しております。このたび今まで永い間発行されていた「日曜学校ガイド」は、毎月の聖徒の道に日曜学校関係の欄として、四頁の予定で掲載されることになりました。日曜学校をより進歩させるためには、皆様方の御努力もさることながら、そこに集う会員、求道者の協力が絶対に必要です。そのような意味で広範囲の読者層をもつ聖徒の道を通して一人一人にお願いしたいことや、お役に立つようなことをお伝えすることができるのは大変嬉しいです。さてこの与えられた四頁を次の事柄に使いたいと思っております。

(1)二頁はレッスンに役に立つようなものをインストラクター（ユタ州で発刊されている日曜学校専門雑誌）より飜訳して、教師及びクラスの生徒の参考に供します。今月は我々にはなくてはならぬ福音書モルモン経の年表を飜訳改良したものを載せました。特にBコース「古代アメリカの生活」子供の日曜学校上級「モルモン経物語」又縄ばりを荒しますが(?)MIAのMメン、グリーナーのレッスン「モルモン経研究ガイド」などに少しはお役に立つ事と存じます。三月号には四月の復活祭にちなんで、イエスの復活に関する参考資料を載せるつもりです。

(2)レッスン予定表

一回に一頁五ケ月分位の予定を載せます。移転する会員、予習する人々のために、又最後がしり切れトンボにならないようにするため、どうか各支部の教師は、この予定に合せて進むようにして下さい。今遅れておりましたら、二課ずつ一回でなさるようにして。Cコースのテキストは「完成への道」ですが、人数が多すぎて二つのクラスに分れるとか、全体として求道者が多すぎてこの本が適当でないとかの問題があるときは支部長とよく相談の上「福音の紹介」を用いても結構です。

(3)練習の讃美歌

次の月の練習の讃美歌の番号と指揮者、オルガニストへの注意を今まで通り、中央支部の南城恍子姉妹に書いて頂きます。

(4)ユタ州日曜学校管理監督、伝道部長の指示、よりよい日曜学校のための諸提案、日曜学校に関する質問、解答など。

皆様からの活潑な御意見、御質問を心からお待ち致しております。

伝道部日曜学校会長（上野道男）

（当月の練習の歌は八十七頁にあります。）

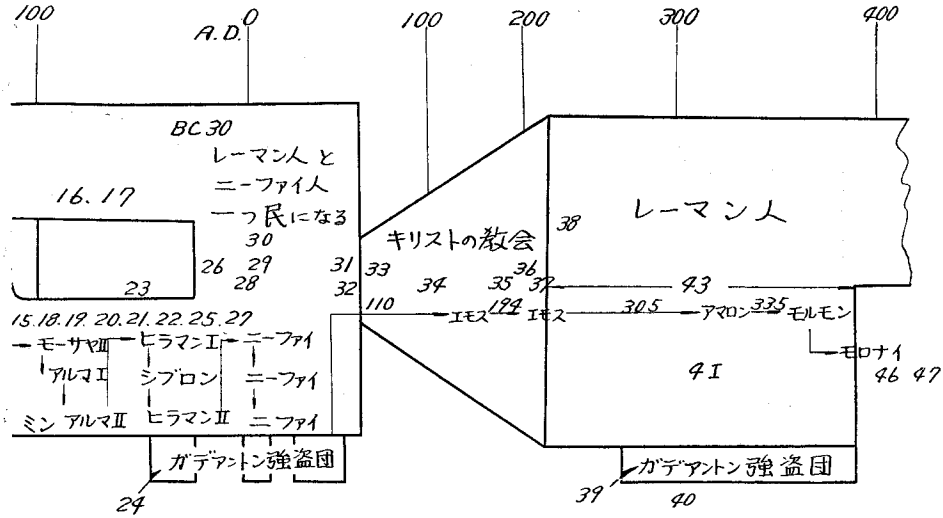
日　曜　学　校

1961年2月・3月・4月・5月・6月　レッスンの計画表

月	日	大人の日曜学校				子供の日曜学校		
		Aコース(12～14)	Bコース(15～17)	Cコース(18以上)	系図コース	上級	中級	下級
		キリストの生涯	古代アメリカの生活	完成への道	家督権の祝福	モルモン経物語	宗教と生活(II)	霊的成長(I)
2	5	第6章	第6章	第6章	第6章	第11章～第12章	第6章	第6章
	12	7	7	7	7	13～14	7	7
	19	8	8	8	8	15～16	8	8
	26	9	9	9	9	17～18	9	9
3	5	10	10	10	10	19～20	10	10
	12							
	19	11	11	11	11	21～22	11	11
	26	12	12	12	12	23～24	12	12
4	2	13	13	13	13	25～26	13	13
	9	14	14	14	14	27～28	14	14
	16	15	15	15	15	29～30	15	15
	23	16	16	16	16	31～32	16	16
	30	17	17	17	17	33～34	17	17
5	7	18	18	18	18	35～36	18	18
	14	19	19	19	19	37～38	19	19
	21	20	20	20	20	39～40	20	20
	28	21	21	21	21	41～42	21	21
6	4	22	22	22	22	43～44	22	22
	11							
	18	23	23	23	23	45～46	23	23
	25	24	24	24	24	47～48	24	24

註　3月12日、6月11日は東中央地方部では大会がありますので空けておきました
他の地方部では地方部大会の開かれる日時によつて調整して下さい。

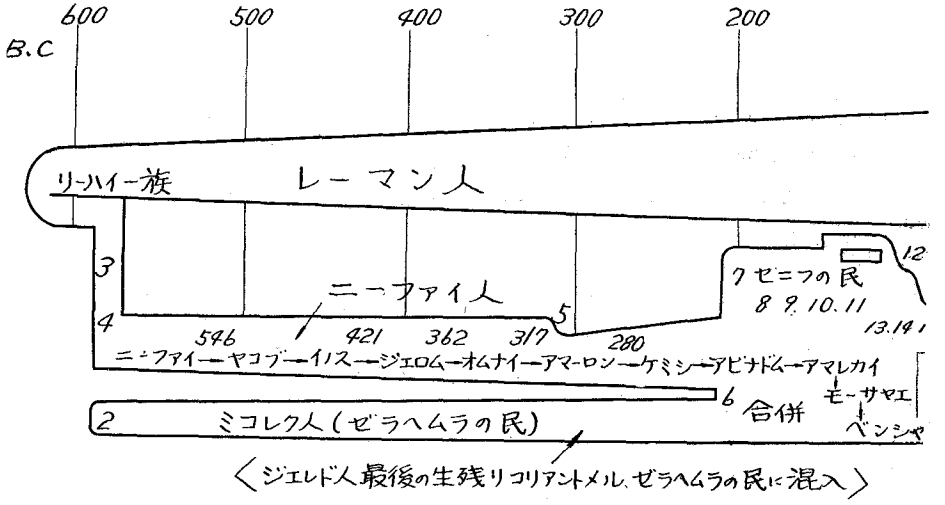
経典年表」



件	BC
民受浸す	約85
事を止める	83
唖にされる	75
の旗」を挙げる	73
撃退	72
参加	56
	55
される	52
ーファイ大判事になる	39
よるレーマン人の改宗	30
戦争	20
ヘムラにて予言	6
し始まる	2
はれる	0
	AD
されたしるし起る	
ニーファイに現はる	34
トの教会盛んになる	36

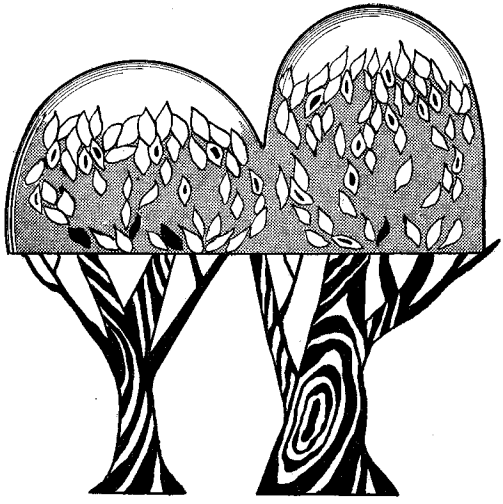
番号	事件	AC
34	12使徒3人を除いて皆死す	100
35	財産奉献の律法くずれる	231
36	キリスト教会を否定する教会続々建つ	210
37	民は再びニーファイ人とレーマン人に分裂	231
38	悪人が増々多くなる	244
39	ガデアントン強盗団再び現はれる	260
40	ニーファイ人レーマン人共に堕落著し ガデアントン強盗団全国に拡がる	300
41	モルモン生る	311
42	ニーファイ人とレーマン人との戦始まる	322
43	かの三人のニーファイ人立去る，モルモン，ニーファイ軍の司命長官になる	326
44	モルモン，記録をシムの丘より堀り出す	375
45	ニーファイ人，クモラの岡で全滅	385
46	モルモンの子モロナイ，父の死とニーファイ人の全滅を記す	400
47	モロナイ死す	421

「モルモン



番号	事　　件	BC
1	リーハイー族エレサレムを離れる……	600
2	ミュレク人エレサレムを離れる……	約590
3	ニーファイ人神殿建設……	571以前
4	ニーファイ人とレーマン人の戦い……	561以前
5	悪いニーファイ人亡ぼされる……	318
6	ニーファイ人とゼラヘムラの民との合併……	200以前
7	ゼニフの民ニーファイ•リーハイの地に移る…	約2000
8	アルマ•ニーハイ•ニーファイの地にて生る…	173
9	ゼニフ死す，ノア王となる……	約160
10	アビナダイ，ノア王の前で予言する……	約150
11	アルマ，モルモンの泉で授浸する……	147
12	ノア王の子，リムハイ王の派遣する探険隊，ジエレド人の遺跡を発見する……	123
13	リムハイ王の民，ゼラヘムラに帰る……	122
14	アルマの民，ゼラヘムラに帰る……	約122
15	アルマⅠ•モーサヤⅡ死す民主政治建てらる……	91
16	モーサヤⅡの息子達，レーマン人に伝道……	91

番号	事
17	ラモーナイの父と沢山の
18	アルマⅡ伝道のため大判
19	キリスト反対者コラホル
20	司令長官モロナイ「自由
21	モロナイ，レーマン人を
22	アンモン人2000人戦いに
23	5400人北大陸に移住開始
24	ガデアントン強盗団組織
25	ヒラマンⅡ死す，長男ニ
26	ニーファイ•リーハイに
27	ニーファイの民に平和と
28	レーマン人サムエルゼラ
29	キリスト降誕寸前のしる
30	キリスト降誕のしるし現
31	大判事殺され国家分裂…
32	キリストの十字架，予言大風，地震などキリスト
33	人々は皆改宗し，キリス



MIA リーダー

ダンスを教える指導者へ

MIAへ集まる若い人達の間にダンスが急速に普及してきている。と同時にダンスを習いたいと云う人達の為に有能なダンス教師の養成が必要となってくるので、今月はダンスを指導する方々に次の諸点に留意して欲しいと思います。

一、あなたは始めてダンスのクラスに出席した新しい会員（またはお友達）をそのクラスの人達に紹介しますか。

二、まだダンスをよく知らない人がまごついている時に助け舟を出しますか。

三、ダンスのクラスに出席している人達が部屋の四隅で雑談をし始めた時にどう善処しますか。

四、折角ダンスを楽しみに集まった人達が次のMIAの時には他のクラスに出席している時はどうしたらよいですか。等々……。

先ず第一の項に就いて考えてみよう。私達が見知らぬ人とダンスをする時に、その前に自己紹介をするのとしないのとでは親しさと、楽しさの点で大きな相違がある事を幾つかの経験を通して知っている。実際に多数の人達の間で新しいお友達を紹介するのは一方的であるにせよ効果的である。若し時間が許されるならば両方で名乗り上げるのが望ましい。第二の点はあなた方指導者が始めてダンスを習い始めた時を顧みて大切な問題である。

ともすると未熟であった時代を棚に上げて「こんなに何回も教えているのに」と匙を投げ勝ちであるが、相手が如何に一生懸命覚えようとしているか考える必要がある。またそのように途方にくれている時の助け舟がどんなに心強いものであるかを知らねばならない。

では具体的にどうしたらよいでしょうか。集まっている人数にもよるが以前から出席していて多少心得のある人を出来得るだけ準指導者として初心者のパートナーにしてやる。場所に余裕のある場合には、進歩の度合に応じて数グループに分けるのも効

果的である。いずれの場合でも指導者は指導の水準をどこに置くかを適格に判断する必要がある。

第三の問題はダンスのクラスに限らず全ての活動にも見られる共通の悩みである。この悩みの原因として二つある。一つは他の活動が無くまたあっても興味が無いので仕方なく出席した人達。年令や性格の相違から由来するのもあるが、大部分は「ダンスに対する無知」からきている。知らないままでよいと云う消極的な態度を打破するように各指導者は適切な方法を講じて欲しい。他の一つは指導技術が拙劣である為に盛り上りの無い雰囲気を醸し出すからである。この為にも祈禱会に出席して充分な打ち合わせをする必要がある。更に指導者としての条件は熱心なMIAの会員であり安息日の集まりによく出席する人を選ぶべきである。特にダンスに対する偏見とも云うべき先入観を是正し健全なMIAレクリエーションとして育て上げる為には指導者の人選に周到な配慮が望まれる。立派な人格と敬虔な態度を身に備えた指導者の下に行なわれる活動こそ真にMIAの目標とするものであろう。

最後の項はまさに指導者の成績を表わすバロメーターである。前の問題とも関連するが指導者は或る意味で良き権威者でなければならない。雨垂れ式のピアノを弾く教師がどんな立派な講釈をしたところで所詮誰の傾聴も得られないと同じように指導者はダンスに精通するよう努力して欲しい。そしてダンスに集まった人達が何を望んでいるかを常に心に止めてプログラムを作成してもらいたい。

（伝道部YMMIA会長　佐藤襄二）

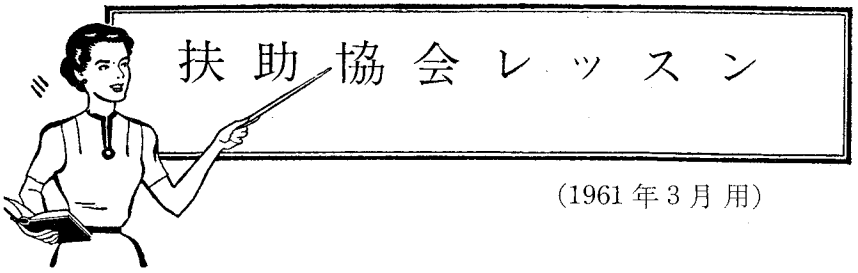
三月二十二日「演説祭」

（演説の指導者は、此の夜の催しの準備と宣伝、演題の提出に責任がある。）

今晩は演説のコンテストが行われるはずである。演説の指導者は前もって、どの様な方法でそれを行い、どんな演題を提出するか、亦如何なる審査基準と方法を用いるかを定めていなければならない。（MIA手引、一九六〇―六一年用、三十四頁参照）

一つの提案がある。Mメン、グリナーと、エンサイン、ローレルとが同じプログラムを行うわけであるが、もし大きな支部であって参加人数が各々多い場合は、Mメン・グリナーの部とエンサイン・ローレルの部と二部に分けて行う方が良いと思う。その場合演題は同じものを提出するか、或いは各々違ったものを撰ぶか一応各クラスに於て希望を聞くことが必要であろう。亦其の場合に於て審査基準を変える必要はない。参加する人々は皆自分でMIAの標準に心しながら演説の主題を選ぶべきである。此の年中行事の一ツであるスピーチ・コンテストにすべての人々が参加するように呼びかけるべきであり、その参加者の人数によって持ち時間を定めるべきである。参加者が余り多い場合は前もって各クラスに於て予選をなすことが良いであろう。それ故にコンテスト参加者は数週間前に申し出るべきであり、すべての人々が此のプログラムを知る様に早く準備して、良く宣伝すべきである。参加者が前以って何等の準備もなく順番に従って立ちあがり、即席に自分の話す題目について少しばかりの自分の考えや意見を述べる様なことをしない様に注意すべきである。此の素晴しい夜に招待者を迎えるのも良いことであり、審査員は前以って選び、審査基準を撤底させておこう。さて良い指導者が良く準備した今夜のプログラムは必ず成功するであろう。

（伝道部YWMIA会長　田中栄子）



（1961年3月用）

神学

「教義と聖約」

第三十課「過去・現在・未来」（テキスト・教義と聖約第四十五章一節—四十二節）

目的「主の御旨に従うことが必要である理由、および主の再臨に備えるためにそのしるしを知ることが必要である理由を学ぶ」

予言者とその民

本教課の表題は神の予言者の「つとめ」なるものを示唆している。この地上に於ける神の王国を進展させて行くために果すべき予言者の責任は数多くあるけれどもその主要な「つとめ」の一つは教会を導くために啓示をうけるということである。そのように教会を導くためにうける啓示は一例をあげてみるならば、ある時には過去のことに触れていることもあろうし、現在および将来に於て聖徒が従順であるよう勧めていることもあり、また以前に与えられた聖句を明瞭にすることにも関連し触れている場合もある。そのように予言者は主の目的について自らが理解しているところに従って他の予言者のうけた啓示を活用するのである。現在この世に生を享けている生ける予言者に啓示が授けられる今一つの目的は、今の神権時代の人々に訓戒と警告と助言とを与えるためである。言葉を換えて云うならば予言者は予言の「みたま」によって、現在の種々なる状態を人々に解説する力を授けられているということである。予言者は将来起る災害に対して聖徒らが前もって充分に警戒することができるように、主の御旨の如く、将来起る出来事を先見する特権を有している。教義と聖約に対する主御自身のはしがきには、はっきりと教義と聖約中の啓示は警告の声に他ならないということが記されている。予言者ジョセフ・スミスは多くの他の理由と共に、この末日にもたらさるべき裁きがあるが故に啓示をうけるべく主によって召されたのである。（教義と聖約第一章参照）

歴史的背景

ジョセフ・スミスが第四十五章の啓示をうけた当時、反対者は教会が着々として挙げるその効果を台無しにしようと種々努力した。

「当時（千八百三十一年の早春）人々が当教会の事業を研究したり、或るいは信仰を抱いたりすることを妨げようとして多くのみだらなうわさや、つまらぬ作り話などが新聞紙上に公けにされたり、各方面に流布されたりした。千人乃至二千人にのぼる住民が滅ぼされた中国での大地震については「中国に於けるモルモン教の仕業だ」などといくつかの新聞紙上で茶化された。しかし偏見と邪悪によってつくり出されたあらゆる事柄に対抗して行かなければならなかった聖徒にとって嬉しいことに、私は以下の如き啓示（教義と聖約第四十五章）をうけたのである。

何故従順であることが必要か

何故主が誡命を与え給うかということについての知識や理由のすべてが一つの啓示でことごとく与えられるわけではない。しかしながら第四十五章には主の御旨に厳密に従うことが必要であるといういくつかの理由が述べられている。この啓示は神の王国がその民に与えられているという事実を述べてはじまっている。（教義と聖

約四十五章一節）聖徒によって王国が所有されるということは、聖徒自身の努力によって救をかち得るということと同じである。しかしこの祝福は従順な者のみに与えられるものである。何となれば救は神の子にとって得ることのできる最大の祝福に他ならないからである。それ故全く従順であることが必要とされることは明らかなことである。何故人は従順でなければならないか。イエス・キリストは他の世界と同様、私たちの住むこの地球の創造主である。主は至高の御方であり、また私たちは主の御力によってこの世の恩恵に与ることができるのである。実に主は私たちが「法」の支配の下に生活ができるようにこのような環境を整えて下さったのである。

果して、私たちの中で明日の生命を保証されている人があるだろうか。死は万人に訪れる。しかしそれは何時であるか。救主は「……死の汝らを捕えざる様わが言を聴け。すなわち、うかと過すひと時に夏は過ぎ去り、刈り入れは終りて汝らは救われざるなり」（教義と聖約第四十五章二節）と仰せになって居り給う。今こそ悔改めの時である。私たち人類のために主が贖いをなし給うたその時に主キリスト（御父と私たちとの間をとりなし給う仲保者）の受け給うた苦しみを人々が充分に理解するならば、人々は主のすべての命に従うよう強く決心させられるに違いない。主キリストの受け給うたその苦しみが余りにもひどいものであったので、主はその毛の穴より血を湧かせ給うた程であった。（教義と聖約第十九章十五～十七節参照）人類がそれぞれ個人の救に与ることができるのはイエス・キリストを通してのみである。それ故主は末日の聖徒たちに御自身の御父に捧げ給う祈りはかれら聖徒のためのものであるということを想い起させて居り給う。（教義と聖約第四十五章四～五節参照）キリストが御父の栄光をたたえるのに従順であったように、私たちも従順であることによって永遠の生命という最大の祝福に与り、もって御父と御子の栄光をたたえることができるように祈るものである。まことに人はよく「おおなんと私たちの神の恵みの偉大なことよ……おおなんと私たちの神の計画の偉大なことよ」（ニーファイ第二書九章十～十三節）と絶叫することができるであろう。それ故「……今日と称うる日の中にわが声を聞け。而して汝らのこころを頑固にするなかれ」（教義と聖約第四十五章六節）との御言葉通りである。不従順で、その心をかたくなにする者は暗黒の中にある人である。「主はわが光明なり」と主の民は唱う。何となればイエスは「……世の光なり、世の生命なり。すなわち暗黒に照るに暗黒はこれを悟らざりし光……」（教義と聖約第四十五章七節）に他ならないからである。この啓示には以上の他にも従順であることが必要であるということが更に教えられている。ユダヤ人は古代に於て国民全体としてかれらの民の一人であった「メシヤ」をうけ入れなかった。過去に於けるこの先例は以下のような考えを持ち出してくる。すなわち「……キリストが「その民」のもとに、すなわちこの神権時代に於ける御自身の教会に来り給うたにも拘ず「主の民」が主に聴き従うことを拒んだということが二度と口にされることがないように……」と。

従順であることは一つのチャレンジである。第四十五章の十一節から十四節までに主はその民が全く従順であることによって現在の神権時代にあっても再現することができる過去の出来事について再び触れて居り給う。これらの聖句を読む読者が注目させられる点はいくつかあるであろうが、その中で私たちは次のような事柄をあげることができる。

一、聖書（創世記五章二十四節）の中に述べられているエノクが実在した人物であるという歴史上の事実を主がこの近代の啓示の中で確認し証明して居り給う。

二、エノクの町とその住民とが実際にこの地上より取り上げられたこと。

三、エノクの町が義しき者の日、すなわち福千年にこの地上に帰り来るという約束（エノクの神権時代と啓示によってエノクに知らされた数々の偉大な来出事についてはモーセ書第七章を参照のこと）

今日の神の聖徒に与えられているチャレンジは福千年が始まる時に、もしこの地上に生き永らえているならばシオンすなわち新エルサレムの民として、エノクの町がこの地上に帰り来る時にその町の民と相まみえるために準備することができるような生活を営むことである。（モーセ書七章六十二―六十五節参照）

主はまた過去の時代にあって義しき者の日を待ち望みつつ、自らを「世にさすらう旅人」と考え、しかも聖い生活を送っていた人々も復活した人々として「骨肉を以てこの神権時代の聖徒たちと共に「かの日」を見るであろうと約束して居り給う。（モーセ書七章六十二―六十五節と比較せよ）果して貴方方はその時に尚死ぬべき用件をもってこの世に生を享けていてもいなくても、貴方方はそのような祝福に確かに与り得るような忠実な生活を営んだ末日聖徒の中に数えられるであろうか。

永遠の誓約の目的

過去の事柄と完き福音に何故従う必要があるかというその理由を御語りになっていらっしゃった時に救主は人々には神の子となる機会と永遠の生命に与る能力をうける機会があるということを知らせ給うた。（教義と聖約第四十五章八節参照）まことにこの目的のために永遠の誓約がそのすべての権能と栄光とをもってこの地上におくられ確立されたのである。（教義と聖約第百三十三章五十七節参照）この誓約こそイエス・キリストの完全なる福音に他ならないのである。（教義と聖約第六十六章二節参照）しかしながら主はこの世に福音をおくり給うた他の三つの理由、すなわち他の目的についても告げて居り給う。それは㈠「世の光」とせんがためである。すなわち世の人々に生活の方法を示すためであり、㈡「わが民とこの光を求め来る異邦人とのために一つの旗とするためである。―福音はいつも福音をうけ入れる人たちにとって救をもたらす手段となるし、又福音は聖徒の生活そのものにより万国の人々に対して一つの旗じるしとなる。（教義と聖約百十五番五節、イザヤ書四十九章二十二節、六十二章十節参照）㈢キリストの再降臨の前に道を備えるための「使い」とするためである。（教義と聖約第四十五章九節参照）これらすべての目的は大切である。福音を通して永遠の生命のよきおとづれを公けにするようにという聖徒に与えられているその使命とまたこのよきおとづれを公けにするということはすべての人々にとって、ある程度出来ることであるということを人が考える時、人は自らの召を充分に果そうとの熱意に大いに促がされるに違いない。

「われ汝らと道理を論ぜん」

主の御許にやって来た人たちに強固な論拠を示すということにつけ加えて、（教義と聖約第四十五章十節参照）主は古えの人々に予言を与えたように予言を語るであろうと仰せになり給うた。（教義と聖約第四十五章十五節参照）しかし主は何について予言をなさるのであろうか。今日の聖徒のこころの中にあることであり、また時の絶頂の神権時代の聖徒のこころの中にあった事柄についてである。贖主がこの世にあって導きと恵みを施して居り給うた時にその弟子たちは、主が天の雲に乗って来り給う時のしるしは何であるかと主に尋ねた。第四十五章の十六節と十七節で主があたかも古えの弟子たちに直接に話して居り給うかの如く「現在」時制の言葉を使って居り給うことに注意してみよ。（教義と聖約の註釈書二百五十九頁（英文）も参照のこと）

時の絶頂の神権時代の出来事について予言を語り続けて居り給うた時に、イエスはその弟子たちに神殿の崩壊について予言し給うた（マタイ伝二十四章一―二節、ルカ伝二十一章二十三―三十四節と比較せよ、教義と聖約四十五章十八―二十節を読め）何と文字通りにこの予言が成就したことか。ユダヤ人の散乱をも含む神殿とエルサレムの町の包囲されたことと、崩壊したことの大略はジョセファスの「ユダヤ人の戦争、第六」に記されている。（教義と聖約の註釈書二百六十一―二百六十二頁（英文）を読め）読者が第四十五章を読み続けて行くと、主がその啓示の中で宣言して居り給うことが成就されたということを見出す。まことに荒廃は時の絶頂の神権時代にユダヤ人の上にのしかかってきたのである。「されど今の代のユダヤ人滅亡するは、わが今彼らにつきて語れるあらゆる荒廃来りたる後なり」（教義と聖約第四十五章二十一節）この予言に続いてイエスは、この四十五章の啓示によれば、弟子たちに向ってかれらが主の再臨の時に「世界の終末が来る」ということ。すなわちこの世の崩壊が来るということを知っていると語り給うた。（高価なる真珠ジョセフ・スミスの著一章四、三十一節）それから主はこれらの事柄について弟子たちが関知しているところは真実であるという保証とすべての予言は成就するに違いないという保証とを与え

給うた（教義と聖約四十五章二十三―二十四節）すでに述べたようにこの啓示の二十四節までは時の絶頂の時代、または時の絶頂の神権時代に関係することであるが、しかしこの教課にこれから出てくる聖句（教義と聖約四十五章二十五―四十二節）は私たちが生を享けている時代すなわち時満ちたるこの神権時代の出来事を記している。

時満ちたる神権時代

エルサレムの崩壊と共にユダヤ人が散乱させられたと同様に、この末日に於てかれらの子孫は集合させられることになっていた。しかしその日が来るのは何時であったろうか。キリストによって確立された教会よりの背教が久しく続いた後で、しかもそれから教会がこの地上に最後の福音の神権時代に回復されてからであった。この回復のことは教義と聖約の第四十五章の二十八節中に記されている。

時のしるし

予言者が予知したように、福音が回復されることによって多くの大きな変化がこの地上にもたらされる筈であった。この啓示の中で主は次のようなことを指摘して居り給う。

「その日、戦につきて聞かん、また戦のうわさにつきて聞かん。全世界は揺れ動き、人々は怖れおののきて云わん。キリストは「地」の終末までこの世に来ることを延ばされたり、と」（教義と聖約四十五章二十六節）云うまでもなく福音と教会がこの地上に元通り回復されて以来、地上では戦争と戦争のうわさが増して来ている。「キリストはその来り給うことを延ばされた」との人々の言葉は、この時代に於ける今一つのしるしである。何となればキリストは地球の終末まで来り給わないと人々が教えているからである。（教義と聖約の註釈書二百六十二頁（英文）を読め）その他のいくつかのしるしが続いて記されている。「人々の愛は冷やかになり、不法は地に満つべし」（教義と聖約四十五章二十七節）教義と聖約の註釈書（英文）の二百六十二頁で解説されているように、この聖句の意味は無法の故に大多数の人々がうそいつわりのない非利己的な愛で、しかも絶えるところのない真のクリスチャン愛を持たないようになるということである。人がこの聖句の後半の部分、すなわち「不法（邪悪）は満つべし」との現在の状態について考える時、すぐに現在、世界中至るところで見うけられる罪悪や邪しまな行為の程度や、その範囲に考えが及ぶに違いない。これまでのいつの時代にあっても無法状態が見うけられて来たということについて、いろいろと云われることにお構いなく今日、世の中で性的面の不道徳や事業面に於ける不正直な行為や、人間及び生命そのものに対する軽べつという形をとって、広くはびこっている組織された罪悪行為や組織されない罪悪行為そのものは末の日のしるしの一つである。人々のこころが完全な福音に対してひややかであるということも、今一つのしるしである。予言者ジョセフ・スミスを通じて福音がこの地上に回復されていても、世の人々は「……その光を受け入れず。それは彼ら光を認めざれば、人の教えの故によりてわれにこころを背くればなり」（教義と聖約四十五章二十九節）と主は仰せになり給うた。末日聖徒イエス・キリスト教会に改宗する人々の数は現在世界中で増加しつつあるが、しかし世界の人口と比較してみると、真の教会の会員の数は極めて僅かである。予言されたようにこの世の人々は福音のメッセージを拒み受け入れようとしない。そしてそのように拒むことによってかれらは自らの頭に予言された裁きをもたらすのである。人々が主の故の計画を拒絶し、また邪悪が満ち続ける時に「地に溢るる懲しめ」をこの神権時代の人々が見る時が来る。「何となれば世を滅ぼすべき疫病が地を覆うからである」（教義と聖約四十五章三十一節）また近代に与えられた他の啓示により、そのような疫病の性質や範囲がある程度知られる。（教義と聖約二十九章十八―十九節参照）このような出来事の起る難儀な真中にあっても「……主の弟子たちは聖地にたちて動くことなかるべし。されど悪しき人々の中には、声を挙げて神をのろい死ぬる者たちあらん」（教義と聖約四十五章三十二節）ということを主は知らせ給うた。主の弟子とは真実主に従う人であって、この啓示に関する限り、イエス・キリストをうけ入れてキリスト教会の会員になった人である。これらの弟子たちは集合の場所として、啓示によって

指定される場所に立つに違いない。（教義と聖約百一章十六―二十一節参照）主の再臨が真近いということを示す他のしるしは、いろいろな種類の荒廃である。洪水や砂あらしや暴風や他の騒動のある真中にあって、すなわち風雨火石が相共に主の僕べをうけ入れない証を立てている真中にあって、人々は続けてそのこころをかたくなにし、互に殺し合い、そして神をのろって死ぬであろう。古えの弟子たちがこれらの種々なるしるしについて関心を示した時に「……そはすべてこれらの事起る時は汝らに為せる約束の成就するを汝らの知らんが故なり」（教義と聖約四十五章三十五節）との確証が与えられた。いちじくの木の若芽が萠え出て、その葉が柔かくなることが夏の近いしるしであると云われるように、これらの種々なる出来事が起るときに（教義と聖約四十五章十六―三十三節参照）「時がすでに迫っている」（教義と聖約四十五章三十八節）というしるしであると信者は知ることができる。その時とはどんな時であろうか。それは異邦人の時が満つる時である。

「異邦人の時満つるべし」

示現によってニーファイはイエスがはじめにユダヤ人に現れ給うということを、それから後に異邦人が完全な福音をうけ入れる機会に与るということを目のあたり見ることを許された。しかしながら後の時代に於ては異邦人がこの特権にはじめに与り、ユダヤ人は後に与る筈である。（ニーファイ第一書十三章四十二節参照）このようにして先なる者が後になり後なる者が先になるのである。（ルカ伝十三章二十八―三十節と比較せよ）モロナイはジョセフ・スミスにこの時は「間近である」（高価なる真珠ジョセフ・スミスの著二四十一節）と告げた。時満ちたる神権時代の後程すなわちエルサレムがもはや異邦人によって踏みにじられない時、それが異邦人の時が満つるしるしであることになっている。（教義と聖約四十五章二十五節、三十節、ルカ伝二十一章二十四節）このしるしはユダヤ人が福音の伝道に与る機会をうけるという移り変りの時期のはじめに相当するはずである。

時のしるしの目的に関する予言者の答

当教会の第六代目の大管長ジョセフ・F・スミスはこれらの時のしるしの目的について以下のように語った。「この偉大なる人類社会には多くの社会悪や個人悪や宗教面の不信仰が存在するし、また我々の永遠の父なる神の主権と力と目的とに対する人類の無感覚さは実に甚しいものがある。それ故父なる神が人々のこころに御自身の存在と目的とをよく感じさせるため、自然や人々の諸問題に介入し給うことが必要とされるのである。たとえ人々が主なる神の意図し給うところを理解し、認識するために自然の大震動に圧倒されなければならなくても、父なる神の意図し給うところは成就される。世界に現在のような状態が存する限り、誰一人としてこのような天罰をまぬがれない。末日聖徒は自らの邪しまと罪の故に自分自身震えおののくかもしれないが、しかし罪悪の故にこの世に大いなる裁きがもたらされるということを信じている、末日聖徒は聖典に述べられているところ堅く信じているのである。すなわち裁きをなし結うためにキリストが来り給うそのしるしとして、国々の民に災いがふりかかるということを信じている。末日聖徒は神が火や地震や津波や火山の噴火や嵐を支配し給うことを信じている。まことに末日聖徒は父なる神を自然とその法則を統べ給う支配者であると認め、すべてのことに神の御手があることを卒直に認める。我々は人類がその罪を悔い改めてこの地上を義によって統治し給うために来り給うキリストの再臨に備えることができるよう、神の裁きが人類に神の力とその目的とを感じさせるためにもたらされると信じている。

討論のための質問

一、予言者のつとめは何であるか

二、何故末日聖徒は主の御旨に従順でなければならいか。

三、何故あなたはこの神権時代に従順であるということが福音の他の神権時代と同様に大きなチャレンジであると考えるか。

四、この教課に記されているいくつかの「時のしるし」を挙げよ。これらのしるしのいくつかがすでに成就したことについてそのいくつかの証拠をあげよ。

五、スミス大管長が述べられたように末日聖徒は末の日に於ける裁きについてどのように信じているか。

家庭訪問教師のメッセージ

「教義と聖約」に基いて実践する真理

メッセージ第二十八「教義と聖約第五十章四十節から

「されば、汝らは恩恵と真理の智恵に於て生長せざるべからず」

目的　福音は進歩による救いの計画である。恩恵と真理による生長によってのみ永遠の生命に向って進むことができることを学ぶ。

私たちの多くは、宣教師の任を終えて帰った人々が帰国の挨拶をするとき、必らず宣教師として働いた期間は一生のうちで一番幸福な時であったという確信を述べることに胸を打たれています。確かに、この幸福感をもつのは、その人たちが伝道をしている期間にもっぱら他人を助け主のために奉仕をする働きをしていたのによるのであります。しかし、もう一つの大切な理由は、宣教師としていろいろの経験をする期間が「恩恵と真理の智恵」による生長に専念している時であることです。

幸福と智恵の生長とが密接な関係にあることを充分に悟っていないことが、余りにも多いのは事実であります。もし私たちが為になる智恵を増すならば、私たちは能力と人格とを発展させて、イエスが私たちに「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」（マタイ伝五〇四十八）と言ってお定めになった目標に向って進むのであります。

真の幸福と喜びの粋と言うべきは、このような進歩のことであります。

恩恵と真理に於て進歩した過程の神聖な例をあげると、それは救い主イエスがお進みになった過程であります。聖書を見ると「幼な子は、ますます成長して強くなり智恵に満ち、そして神の恵みがその上にあった」（ルカ伝二〇四十）と誌してあります。救い主イエスが十二才の少年であった時、その両親はイエスが神殿の中で賢人たちと言葉を交え、その理解と智恵とを以て彼らを驚ろかせておいでになるのを見つけました。

この時から、約三十才になって導きと恵みを施し始めになるまでのことは、聖書に「ますます智恵が加わり、脊たけものび、そして神と人から愛された」（ルカ伝二〇五十二）とだけ誌してあります

イエス御自身は恩恵と智恵に於て生長し、万人に模範をお示しになりました。自分自身の経験によって、万人が真理についての智識を増す努力をするならば、喜びと満足とを得る大きな可能性は万人のすぐ前にあることを知っておいでになりますから、イエスは私たちが「恩恵と真理の智恵に於て生長せざるべからず」という誡命をお下しになりました。

「教義と聖約」第五十章には、神によるところの光明を受けて神に従うことがいよいよ久しい者は「その受くる光明いよいよ明らかとなりてついには完き昼となるべし」（五十〇二十四）と、万人に賜うた主の約束が誌してあります

真理と智恵に於ける生長は、肉体の強さと力の生長の場合と同じ原理の上に立っているようであります。もし筋肉を使わないでおくときには、じきに弱くなって役に立たなくなることを誰でも知っています。これに反して、筋肉を使えば筋肉はますます太く強くなります。このように、真理の智恵を得れば得るほど、更に偉大な真理をつかむ能力がいよいよ増すことは絶対にわかり切ったことであります。その上に、一つの真理を獲得すると、つずいてまたほかの真理の扉が開かれることはまことに重要な事実であります。真理と智恵に於て生長することは、花の開くような過程であります。私たちが智恵の道をたどるにつれて、無数の新しい路が私たちの視界にあらわれ、私たちの旅路はますます興味があり、美しく、はげましを与えるようになるのであります。ジェームス・ラッセル・ロウェルはかって「真理におくれずについて行こうとする者は、いよいよ高くいよいよ前へ進まねばならない」と誌しました。

イエスは「義に飢え渇いている人たちは、さいわいである。彼らは飽き足りるようになるであろう」（マタイ伝五〇六）とお言いになりました。また智恵を努めて求めよとくり返し勧めて、もし努めて止まないならば扉が開かれて理解と智恵とをめぐまれるにちがいないと約束なさいました。

私たちが真理について本当に知っているといくら思っても、真理を完全に知ることはできません。もし私たちの精神と霊とをいつまでも若々しく強くしておきたかったなら、学ぶことを止めてはいけません。私たちはたえず生長するように努めなければなりません。もし私たちがいつも努力するならば、主は永遠に湧き出る真理の泉から糧を与えるにちがいないと約束しておいでになります。

社会科学

「核時代に於ける霊的生活」

第十二課　価値(ねうち)(評価)その増大と意義

目的　価値とは何か、如何に発展するか、および生活の中に於ける価値の意義等を更によく理解すること。

はしがき

正しい生活をするには力強い性格が要るということは何人でも認めるところであるが、単に力だけでは充分とは言えない。力だけということは、目くら滅法向う見ずな攻勢ということができる。必要なのは、目的に対する適切な態度と正しく批判した価値とによって適切に支配される力である。その時にだけ、私たちは善いものを造り出す生活を期待することができる。

私たちがきめるいろいろの決定は、私たちのもっているいろいろな価値に基づいて為されるという充分な証拠がある。さらに、私たちの多くは、この複雑な世の中に住んでいる結果として、相容れないところの価値に直面することが度々あることを認めている。従って、私たちに属していない物をとるかとらないか、価うちのある計画を支持するために時間を割くか割かないか、教会や共同体の中にあっていろいろな責任を負うか、またはほかのことに努力する方を選んでその責任を避けるかは、私たちがそのいろいろな価値を段階に従って分類することによって右にも左にもなるのである。

はっきりと価値を現わさない人々の中では、人生に対する無関心、無頓着な態度が見られ勝ちである。私たちは、何ら現わすべき真の自己を持っていない故に、何にでも従う極端な順応者になったり、あらゆることに不平を唱える反対者になったりする気まぐれな性格の人を見出し勝ちである。

そこで、私たちが責任を負っている他の人々を指導するために適切な備えをするという面からはもちろんのこと、私たち自身の生活を十分に利用するという面からも、価値を理解することは大切である。しかしながら価値とは何であるか。どこから価値が生ずるか如何にして価値が発展するか。私たちの生活の中で価値の演ずる役割りは何であるか。

価値の定義

考える人々は長い間価値ということに注意を向けてきたが、近年社会科学者たちは盛んにこの価値の研究をしている。価値という言葉、もしくは考えは、万人の満足が行くように定義をすることがむつかしい。しかしながら、今実際上役立つ一つの定義として、次の言葉を受入れることしにしよう。価値とは、ある人の生活の中で優先するものであり、その人が大切にし、意義のあるもの、価うちのあるもの、大切なものと思っているものである。ある人のもっている価値は、その人が善いと考えるもの、その人の生活に意義と目的とを与えるものと同じものである。価値は人間の態度、ふるまいを左右する要素である。価値は或る目標に達するための優先と選択とを与える考えと態度が一しょになったものである。これらの目標もしくは価値は個性の中に於て重要な位置を占める。一たび価値が定まると、望むところの目標を達成することのできる態度と行為とを選び、優先的にこれらの態度と行為をとるのである。価値は人のふるまいの原動力となると共に、ふるまいを抑制する。従って価値は積極的でもあり消極的でもある。各人は或る目標を大切なものと考えると共に、ほかの目標をきびしく回避する。

価値は如何に発展するか

私たちの持つところの価値は、賜り物として来るのではないから、これを自分の子供や他の人々に与えることができない。価値は「価値づける」ことによって来る。すなわち大切にし、かわいがり、貴いと考えることによって成長する。それであるから誰もこのことを私たちの代りにすることはできない。

小児に見られるところの価値の

発展は、いくつかの段階があって、それらを一々見きわめることができる。七、八才までの子供には価値の問題に反応を示す傾向が見られる。彼らは両親や家族の人たちがする通りにし、また始めて家庭の中で覚えた通りにほとんどすべてのものの価値を定める。この時期がすぎると、次の二三年間は次第においそれと価値をつけないようになる。青年期の始めごろ、若い者たちは特定の規則で行為をしばられるのを拒むことがあり、すでに学んだ以前の価値からも、また先生、同輩、英雄、映画スター、有名人などと接する結果出合うかも知れない新しい価値からも彼ら若い者たちの支持を得ている一層一般的な原則を展開し利用することがある。同輩の群や英雄などが小供のもっている価値に影響を与える程度は、その子供が以前にどれほど両親の考え通り自分を一致させたかの程度にほとんど正比例する。もしも両親のもっている価値が充分に身についたものであり、子供が自分をほとんどいつも「正しい」ことを行っている者であると認めるならば、これらの価値に正反対の価値は一層容易に抑えられる。子供が自分を、自分自身の価値を持つ物として本当にながめ始めるのはこの後の方の時期である。

各人は生活の中にある経験を通して考えをつくっている一方、またいろいろな事物といろいろな力が自分に影響を与える数々の印象を通して、その事物と力の一つ一つが自分に対して持つ価値を学んで知っている。この価値の観念は一つ一つの考えに入ってきて、各人がその考えについてどう思うかを定める。この価値の観念は、その事に対する各人の態度に影響を及ぼす力がある。

いろいろな価値が発展することを正しく理解するためには、価値と「価値づける」ことを区別することが有益である。価値の内容は「価値づける」取扱いの中にある何ものかであって、「価値づけられた」事物の内部から出てくるものではない。すなわち目標が価値をもっているとは言えない、むしろ目標をもつことが価値である。目標を価値であるとするのである。

いろいろな価値は事物の前後関係の中に在って、前後関係のないところには存在しないことを悟ることが大切である。たとえば、一般的の善というものを論ずることはむずかしい。しかし、或る善人、或る善行、さては或る善い家族のことを語るのは、一層有用であり、また一層はっきりしている。また価値という言葉を修飾するために、いろいろな形容詞を用いると好都合である。すなわち文化的価値、人間の価値、倫理上の価値または中級の価値などと言うと一層意味が深くなる。各々の場合に、私たちは前後関係の中に価値が現われるから、前後関係と価値とを同じものに見ている。私たちは、誰にとってまたは何にとって価値があるかとたずねる。或る環境の中では非常に価値があるとせられるかも知れない或る種の行為は、別の環境の中で軽べつをされるかも知れない。たとえば、優しい親切な性質をもって、感情上の打撃を受けた子供たちと共になって働いている人は非常に高い価値があるとせられるかも知れない。しかし、この優しい親切な性質は、実業界や軍務に服している場合に於ては軽べつをされたりけなされたりするばかりでなく、実際に職業的失敗を招くかも知れない。後者の場合に於て、侵略的であり、ねばり強くあり、他人の感情に無感覚であることが非常に価値があるとされるかも知れない。

そこで、価値は「価値づける」ことから、またよく考えることから生ずる。いろいろな価値は、私たちが自分の生活を設計する方法によっても増強される。私たちは或る価値を生ずるように金の支出を計画する。私たちはしばしば、自分にも価値を与えてくれる人々と交わることを選ぶ。私たちは自分の価値を支えてくれるような読者やそのほかの活動を努めてする。私たちがたえず価値を試験しているので、このように価値が私たちの生活へ入り込んできている。従って、私たちの価値はたえず変化を受けているが、その変化は共同の生活と内省的な思考とによってたえず生じているのである。

価値の衝突

この複雑な世の中に於ける個人生活では、種々価値の衝突が起ることがある。誰でも希望はしたけれども矛盾をしている、または二つとも利用することのできない二つのものから一つを選ぶ問題に直面したことがあるはずである。このような板ばさみに直面したときに、私たちの価値は必らず段階に

分類した順序に置かれなくてはならない。それで、最も高い位置に置かれた価値が行為の方向をきめるのは当然である。たとえば、或るモルモンの青年が「智恵の言葉」を守ることを価値のあるものとしていると仮定しよう。またこの青年はその同輩のグループを受け入れることを価値があるとしていると仮定しよう。この青年は、モルモン教会の会員同志の間では「智恵の言葉」を守ることによって同輩の群から受け入れられもするし、また認められることもできる。この場合二つの価値は互いに強め合う働きをしているので、「智恵の言葉」を守るに当って現われている行為の方向は二つの目標に達する役に立つであろう。しかしながら、もしこの青年が「智恵の言葉」に反対をしている群の人々が、価値のあるものと認めている慣習の行われている環境の中に置かれたとすると、互いに衝突する価値に直面するであろう。そうすると、この青年はその群の人々からは認められるが「智恵の言葉」を破るような行為をするか、または「智恵の言葉」を守ってその群の人々の支持を失うか、二つに一つを選ばざるを得ないであろう。この場合に於て、行為の方向は最も高い価値を得る方へきめられる。

身についた価値

互いに衝突する価値に就いて考えて行くと、価値にはいろいろの性質と強度とがあることが思い起される。もしも価値がその最も効果的の目的に役立つとするならば、或る人の成長と発達とを助ける価値は、最もよくその人の身についていることが大切である。そうでないならば、多くの人々は服装の流行であろうが、政治思想宗教思想の流行であろうが、何でも時の流れのまにまに右往左往することであろう。

最初価値は、子供が偉いと思っている大人たちの通りにするとき真似をされる。子供が大きなるにつれて、価値は次第に個性の一部分となって行くはずである。しかしこれらの価値が注意して調べられ、反省され、よく試験されて始めて本当に身につくというものである。事物の標準と価値とを身につけるとき、始めてこれらによって有益な生活をすることができる。もしも価値が、大人になってもまだ真似事であり、借り物であり、口で言うだけのものであり、表面だけの賛成であるならば、その人はまだ本当に身につけていないのである。それであるから、この事は一人一人が自己の価値を眺めるときに、また子供の中に価値を高めようとする責任をとるときに、主として心にかけなければならぬことである。

子供たちが価値を身につけるのを助けるために用いる方法は、注意深く吟味しなければならない。人はいろいろな信条や独断をかかげておいて、小供が疑問をもつとそれは罪であると言っておどしつけることがある。道徳上の教訓だけでは、体験に基づく信仰による本当の宗教の代りになることはできなかった。これからも代りになるはずがない。道徳上の教訓だけでは、真の価値に欠くことのできない、正直に評価した経験という背景の支えがない、上べだけの価値となるのが当然の結果である。

自分で価値を発展させる

人は自分の価値を感ずるようになることが大切である。子供は、自分を信ずることができなければ、本当に他の人を信ずることができない。従って望むところの価値を身につけることはむづかしい。子供には、自分が善い人である、自分を自分で好きにならなくてはならないという確信を持たせなくてはならない。一生涯共に生活しなくてはならない唯一の人は自分自身である。従って、他の人々を理解し敬まい信ずるようになるには、まず自分を理解し、信じ、尊ばなくてはならない。

今成長している子供が、自分を信じて独りで価値を発展させる能力は、その子供が他の人々から受け入れられるところの方法によって左右せられる。もし他の人々がこの子供を子供として好き、受け入れ、賛成し、自らを試験する自由を与えるならば、この子供は自分自身に対して同じような態度を一層容易にとるにちがいない。これに反して、もしも他の人々が今成長している子供の願いを耳に入れず、不公平に罰を与え、ほかの者よりも劣っているとそれとなく言い、自らを試験しようとしている努力に干渉し、あざけり、無視し、物の数でもないようにあしらい、大てい悪いと言うならば、その子供が自分を善いと思って見ることはむづかしい。ある子供は自分自身について次のように書いたことがある。「私はちっとも善くない。私はばかだ。何にも正しい

ことをすることができない。いつも事件が起ってきている」と。この子供と一しょに生活し働いた大人たちは、この子供の人格を尊敬するという根本的の価値を置き違えたにちがいない。

両親が基礎を置く、そうすると年がたつに従って、小児や青年たちはその家族のふんい気の中で、自分の中に現われる「自己」を築く者となるのである。自分自身の価値がいつも身についてるという感覚をもっている両親は、その子供らの心の中に自分自身を不滅の者としなくてもよい。この両親はその子供に自分たちの愛と指導とを与えて、子供が自信と自尊とを伴う権利をもつ一人の人間となるとき、子供の中に成長する独立という感覚によってその酬いを感じとることができる。この自信と自尊とは、一人の人間が成長し発展するために役立つ価値を身につけるためにはなくてはならないものである。他人が或る人に示すいろいろな態度は「自己」を発展させる初期の段階に於てとくに大切であるが、同時にすべての人は人生のあらゆる段階に於て他人の賛成不賛成に対して敏感である。そこで自分で価値を発展し維持することは、一生止むことのない努力である。

総　括

自分のためにも、また子供たちのためにも価値を発展増大させることは、私たちの肩にかかる最大の責任の一つである。価値は、子供がその両親の真似をするとき、幼児期に於て単純な開始をする。成熟の過程が健全につずいて行われると、価値の発展はますます複雑となるから、人は自分のまわりの文化的価値、同輩の群の価値および自分の反省的思索によって影響を受ける。或る人の価値を注意深く分析することは、一層価値の性質を高め、一層完全に身につけること等に役立つと思われる。従って両親は、子供を育て上げるという仕事を進めて行くとき、遺産を伝えのこすように自分の価値を単に「渡そう」としないで、これらの価値を発展増大させるいろいろの経験を与えるようたえず銘記すべきである。

価値はこれでしまいというきりのないものである。活動的な油断のない人は、自分が新しい考えに出会ったり、新しい経験をしたりこれまで会ったことのない人に会ったりするときに、自分の価値をいつも探索し、修正し、拡大している。もしこの人が過去に「価値づける」か、または単に現在をどこまでも延長して、今の状態を強化することに専念するならば、この人の生活は動きのない死んだものとなるのである。ハロウド・マクミラン首相の言にもあるように「過去は挑躍台とすべし、安楽椅子であってはならない。」私たちは、一般に人が過去から現在に至るまでの状態および現在ある状態に関聯して価値を増大させる必要があるばかりでなく、また人には最高最良の状態に至る可能性があり、能力があることに関聯しても価値を増大させる必要がある。

討論のための考え

(一)小児の心の中に価値が成長する証拠は何であるか。青年の場合大人の場合は如何。

(二)相衝突する価値について更に例をあげて説明せよ。

(三)価値を身につけるに役立つ経験はどのようなものか。

(四)自己の価値は何故非常に大切であるか。

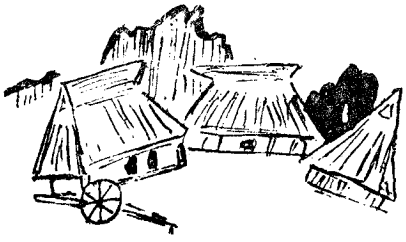
ラスト　ワード

未来のなかに幸福があるように思われるときは、よく考えてみたまえ、それは君がすでに幸福をもっているからなのだ。

希望すること、これが幸福なのだ。

―アラン―

— The Last Word —



伝道本部だより

バプテスマ

村田伝和　阿倍野
小倉国康　〃
高山美保　〃
鷲　進二　〃
安江紀子　〃
陳　普章　福岡
藤田嗣夫　〃
藤原節子　岡町
権藤章恵　福岡
逸見東八郎　岡町
井口良子　福岡
横山政代　〃
吉満友義　〃
新井芳子　群馬
河内誠一　〃
宮崎民子　〃
小淵澄子　〃
清水美智代　〃
新城　武　〃
川井クニ子　広島
川井玉江　〃
槇野スエノ　〃
宗田光浩　〃
北川康雄　金沢
村井由美子　〃

新保悦子　〃
高木　昭　〃
秋山松美　甲府
秋山よし子　〃
秋山幸延　〃
谷口みね子　〃
石井秋次郎　室蘭
根立国夫　〃
岡倉清隆　〃
大島利子　〃
伊藤行男　〃
中川　鮮　名古屋
沢田侑子　〃
阿部修造　新潟
榎本久子　〃
福島克明　新潟
松本愛子　〃
鈴木綾子　〃
道　信慶　西宮
古川政夫　岡町
渡辺　元　〃
綾野為次　岡山
佐藤博子　〃
菅沢信代　〃
佐藤博子　小樽
丁ケ崎操　三宮

伊藤晴国　〃
古西新一郎　〃
錦　隆治　〃
佐藤勝敏　〃
徳永　昭　〃
上田公子　〃
山川悦串　〃
浅香和江　札幌
野口和子　〃
沖本桂子　〃
田川恵子　〃
中田　力　仙台
新田紀夫　〃
渡辺園子　〃
浅野弘子　東京中
東　千佳子　〃
岩瀬宏子　〃
北畠敏裕　〃
北林節子　〃
小浪美智子　〃
小谷野節子　〃
森　瑞江　〃
長島けい子　〃
西脇昭子　〃
佐藤康子　〃
島崎美保子　〃
鈴木満佐子　〃
友定紀久代　〃
都築泰寿　〃
上松英雄　〃

八幡康弘　〃
梁島千珂子　〃
遠藤啓三　東京北
一条清子　〃
石岡　厚　〃
前田慎太郎　〃
水野順隆　〃
向井澄雄　〃
中島隆雄　〃
新延道夫　〃
高江淵昌市　〃
高木正倫　〃
高橋　実　〃
塚田嘉夫　〃
山田恒久　〃
和田淑子　東京南
山村恵美子　〃
木内徳子　東京西
室田敦子　〃
田辺貴生　東京西
山本恵一　〃
日暮早苗　横浜
川口真砂　〃
西崎　泉　〃
西崎八重子　〃
大島　清　〃
斎藤昌子　〃
田村裕子　〃
田崎市郎　〃
寺田軍機　横浜

支部所在地

阿倍野	大阪市阿倍野区阪南町中一ノ三八	
旭川	旭川市八条五丁目	
福岡	福岡市薬院大通二ノ五五	
群馬	高崎市並榎町二七五	
広島	広島市古田町古江四〇〇ノ三	
金沢	金沢市成瀬町一一ノ四	野田方
甲府	甲府市山田町六三	
松本	松本市沢村町一六〇四	
室蘭	室蘭市幸町八九	
名古屋	名古屋市昭和区北山町三ノ四一	
新潟	新潟市中大畑町五五七	金井方
西ノ宮	兵庫県西ノ宮市仁川町四ノ五四	
岡町	大阪府豊中市岡町北二ノ一八	
岡山	岡山市弓野町六一	
小樽	小樽市富岡町一ノ三五	
三ノ宮	神戸市灘区篠原本町四ノ三五	
札幌	札幌市北二条西二四丁目	
仙台	仙台市光禅寺通り二八	
東京中央	東京都渋谷区八幡通一ノ三四	
東京北	東京都豊島区椎名町四ノ二〇六八	
東京南	東京都大田区南千束町二四九	
東京西	東京都武蔵野市吉祥寺三六八	
山形	山形市八日町五八〇	
柳井	山口県柳井市今市三九一	
横浜	横浜市港北区篠原町二九	
普天間	沖縄宜野湾村野嵩区三二八	
那覇	沖縄那覇市松尾区一三九	

編集後記

今月号はあなたのお手もとに届くのが大分遅くなったことと思います。

あなたが、今月号を手にしたとき、何かしら全体の重みに違ったことを感じられたでしょう。ご覧になったように、今月号から、口曜学校ガイド、MIAリーダー、扶助協会のレッスン等が全て聖徒の道に一つにまとめられて発行することになったからです。

この他に神権者の頁も新に作られました。これらの頁は伝道部補助組織管理委員会の委員の人たちが、担当することになりました。メルケゼデク神権の頁は伝道部長老定員会の委員渡辺驢兄弟が担当いたします。

聖徒の道のかくの如き発展の為に、新に、神崎良太郎、山田裕子、田中栄子、片岡雅夫が編集部員として任命されました。あなたの聖徒の道をより良く成長させる為に、一層の努力を払う積りでおります。どうぞ、あなたも、協力して、どしどしご投稿下さい。ご批判、ご希望をもお待ちしております。

（福田）

表紙の説明—キリストの最初の奇蹟婚礼に招かれ水をぶどう酒に変えた話（ヨハネ伝201—12）

月刊「聖徒の道」第五巻第二号
一九六一年二月一日発行
実価　一ヵ年　四五〇円
一　部　四十円
編集兼発行人　ポール・C・アンドラス
発行所　東京都港区麻布広尾町十四
末日聖徒イエス・キリスト教会
北部極東伝道部

聖徒の道
一九五八年三月十七日
第三種郵便物認可第五巻第二号
振替口座東京七六二二六
発行人 ポール・C・アンドラス
発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会 北部極東伝道部
東京都港区麻布広尾町十四

内案書図

教義と聖約
高価なる真珠 上質革製合本……一一〇〇円
モルモン経
教義と聖約 合本……三〇〇円
高価なる真珠
モルモン経（新訳）……二〇〇円
信仰箇条の研究……三三〇円
モルモンとは……一〇〇円
完成への道……二〇〇円
初等協会教科書……一五〇円
総合聖句の手引……一五〇円
日本系図探究要覧……一〇〇円
古代アメリカの生活……一〇〇円
旧約聖書物語……一五〇円
家督権の祝福……一〇〇円
扶助協会手引……五〇円

日曜学校用

宗教と生活 II……一五〇円
よきおとづれ……一〇〇円
聖書物語……一五〇円
福音の実践……一五〇円
聖典中の指導者……一五〇円

MIA用

役員と指導書の手引……一〇〇円
モルモン経研究ガイド……一〇〇円
真理の道……一〇〇円
MIA手引（付録）……五〇円
演劇指導者基礎知識と脚本集……七五円
演説が上手になる法……一五〇円
社交ダンス必携……一六〇円
新しいフォークダンス……五〇円

讃美歌及び歌集

末日聖徒讃美歌……三〇〇円
末日聖徒讃美歌抜萃……三〇円
子等は歌う……一〇〇円
レクリエーション歌集……四〇〇円

……註文は各支部長へ……